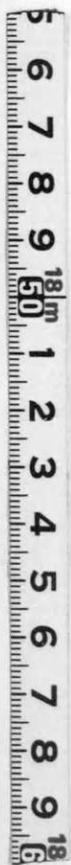


330
49



始



25 380

73

330-49



日本書畫苑

第一

大正
3. 11. 2
購求



日本書畫苑第一 書部

例言

書道の起原は、我邦に於ては日文神代書、肥人書、薩人書などに由來すとの一説あれど、元來支那傳來のものにして、漸次發達するに隨ひ、斯道の名手相繼いで出て、我國一種獨特の書風を見るに至れり、之を和様といふ。書聖僧空海は、所謂和様の鼻祖と尊崇せらるゝ所にして、こゝに始めて和様の基を開きたりといふべし。即ち後世大師流と稱するもの是なり。其後小野道風、藤原佐理、藤原行成等出づるに及び、日本の趣味益々加はり、各自其妙技を發輝せり。中にも行成の子孫は、累世書を能くし、遂に世尊寺流と稱せり。世尊寺流衰ふるに及び、持明院流となり、又青蓮院流、御家流となり、爾來幾多の流派を生じたり。近衛流、三藐院、光悅流、瀧本流、松花堂、大橋流、賀茂流、傳

内流、千蔭流等尙多し、然るに元祿の頃、細井廣澤出で、唐様を唱ふるに至りて、其風盛に行はれ、一世を風靡するの槩あり、其門に關思恭、三井親和、松下烏石等あり、益々之を擴め、次いで澤田東江、市川米菴等の名手出づ。されば當時書家と云へば唐様に限るの風となり、和様は殆ど顧みる人もなき有様となり、以て明治維新に及べり。本篇は、凡和様唐様に區分し、兩様の書法書論逸話等に關する書を收めたり。尤も此種に關する書籍は、既に世に洽く流布せられたるものも尠からず、隨つて本篇に其等の名著を網羅すること能はざるを憾とす。

一 弘法大師書流系圖一卷 本書は、我が書道の流派を示したる系譜にして、世に藤原定頼の作と稱するものに、後人次々に増補したるもの。奥書に、長久二年九月權中納言定頼の記、慶安二年三月賀茂敦直の記、萬治元年十一月台嶺沙門實源の記等あり。

一 麒麟抄十卷 附錄二卷 本書は、我が書道の口傳書にして、文具の選擇及使用方法、執筆法、真行草の書法、假名の書様、消息文の認方、屏風額等に關する故實を掲ぐ。附錄の第一卷は主として執筆上の注意、第二卷は鳥羽玉靈抄集なり、續群書類從中に收むる所の麒麟抄とは、同書異本にして相違せる點頗る多し、著者は世に世尊寺行成と稱すれども、後人の假託に成れるものたるは疑なきが如し。されど相傳古く且著名の書なるを以て、茲に之を收めたり。

一 金玉積傳集諸額次第一卷 本書は、諸額の書法式を始とし、願文、消息文、屏風、障子、銘等に關する故實を記す。もと金玉積傳集中の一部なるが如し。されど續群書類從に收むる金玉積傳集中には見えず。尤も續群書類從本は二卷なれども、同書中、兼明親王入木道傳抄に云の一文あり。其末尾に古言を拾ひ勒して廿卷となし、

名づけて金玉積傳集と曰ふとあれば、單に二卷のみに止まれるにあらざるが如し。また金玉積傳集の著者を、世に兼明親王となすは信ずること能はず。右の入木道傳抄に云の一文は、悉く麒麟抄の序文と同一にして、其末尾の古言を拾ひ、勒して十卷となし、之を名づけて麒麟抄と曰ふの數字相違せるに過ぎず。加ふるに金玉積傳集中の記事は、殆ど麒麟抄中に見えざるものなき有様なり。本書又悉く麒麟抄中に見ゆるものと同一にして、只字句の少異あるのみ。是大に疑ふべし。本書は小杉博士本を採集したるものなれど、博士も卷末に「按ずるに兼明親王御時代の文體にあらず、恐らくは後世のものならむ」と書き置かれたるはむべなりといふべし。要するに金玉積傳集なるものも、後人の假託に成れるものたるは疑なきが如し。されど是亦相傳古きを以て、茲に之を收めたり。

一筆法才葉集一卷 本書は、群書類從に收めたる才葉抄の異本なり。才葉抄は書道の口傳四十八ヶ條あり。安元三年七月二日藤原教長高野山庵室に於て密談したるものなる由を記す。本書も同じく安元三年七月二日教長が高野山に於て密談せるものなりとし、初め二十ヶ條程は全く同一なり。されど其後の六十八ヶ條は全く異なるものにて、都合八十八ヶ條あり。而して才葉抄の奥書には三月日伊經とあれども、本書は卷頭に海住山正三位長房記之とあり。何れが眞の教長の口傳なるや知るべからず。教長は關白師實の孫にして、即ち忠教の子、正三位參議たり。保元の亂起るに及び、薙髮して親蓮と稱し、後高野山に隠れて終るといふ。一夜鶴書札抄一卷 本書は、世尊寺流の書法口傳なり。建治元年八月正三位行能の奥書あり。これを著名なる伊行の夜鶴庭訓抄に比するに、其條項の前後少異あるに過ぎず。殆ど大差なしといふ。

も可なり。著者行能は伊行の孫にして、即ち伊經の子なり。從三位右京大夫法名を寂然といふ。建長七年薨す。

一書法式一卷 本書は、持明院流の書法口傳なり。硯品法、書札法、賀法、假名遣法、懷紙短冊等に關する故實を記す。奥書によれば、永水義高が持明院基時より聞書せるものなり。基時は前權大納言基定の子。元祿二年十二月從二位權中納言となり。同四年正二位に進む。同十二年十二月二十八日權大納言に任ぜられしも、翌日之を辭し、寶永元年三月十日薨す。年七十。

一書道訓一卷 本書は、持明院流書道に關する訓話なり。著者森尹祥は通稱傳右衛門、幕府の右筆なり。持明院家入木道の傳授を受け繼ぎて、旗本及諸藩の士に之を傳授し、大に再興の志を有し、賀茂流等を難じたり。本書を一讀すれば、其意の存する所を知るに足るべし。卷末に、寛政三年永無月三日脚疾を患ひ、伊豆の熱海温

泉に入浴する身となり、旅館一色亭に於て之を草し、本書の外また入木抄追加を著し、二書共に寛政四年六月下旬執政白川樂翁の覽に供じたるよしを記す。寛政十年三月十二日歿し、江戸本郷根津本壽寺に葬る。

一入木道傳書目錄一卷 本書は、我が書道に關する傳授目錄百二十五ヶ條、并世尊寺流傳授書目四十七部、極祕灌頂傳授七ヶ條を記す。奥書に、寛政二年晚秋源尹祥記之とありて、其末に傳授事之順あり。尹祥の子公風之を書添へたり。公風は通稱久次郎。二十三歳の頃歿したりといふ。

一筆道祕傳抄一卷 本書は、松花堂瀧本坊昭乘の高弟藤田友閑齋の又高弟なる小鹽幽照翁が、我が書道に關し門人の問ひに答へたるものにして、全篇問答體にて七十七ヶ條あり。元祿五年初春刊行せるものにて、門人瀧幽傳の奥書あり。

一 能書事蹟二卷 本書は、二卷本と四卷本の別あり。兩者出入前後多く、何れを原本と極め難し。故に黒川眞頼博士校訂の二卷本を本とし、東京帝國大學圖書館、帝國圖書館其他數本を以て之を校訂し、四卷本を(イ本)として之を註す。而も兩者共に引用せる原文の誤脱頗る多く、意通ぜざるものあり。爲に一々原書に依りて更に之を訂正し、實に意外の勞を要したり。本書は、上卷に我國古來より著名なる能書の事蹟百五人を擧げ、下卷に額字の法、宮城殿門額并名目考、神社佛閣額字考證、宸筆扁額等を記し、卷末に錢文筆者考、一切經書寫考、異邦の書に出たる筆道事蹟考を附録とす。寛政四年二月屋代弘賢の跋あり。著者穂積保は傳未だ詳ならず。文化元年異年號考を著したるも同人なり。

一 執筆撥證法一卷 本書は、唐様の執筆法たる撥證法を註解したるものなり。著者細井廣澤は北島雪山より文衡山の書法を傳へ

遂に唐様を唱導して其木鐸たりしことは、世人の冷く知る所なれば、茲に贅せず。本書奥書に、享保四年三月十三日亡子景和の忌日に齋居して之を草し、七月十九日再寫せるよしを記す。

一 觀鷺百譚五卷 本書は、和漢の書道に關する故事逸話等百談を選録し、まゝ著者の奇警なる考按を附註せるものなり。享保十年著者細井廣澤の自序あり。安永四年十月の版行なり。

一 觀鷺百譚批考一册 本書は、中山高陽が廣澤の觀鷺百譚中の二十餘章に對して、其説を補正し、又批評を加へたるものなり。高陽は土佐國高知の商估にして、通稱清右衛門、高陽山人、醉墨山人、松石齋等の雅號あり。詩文書畫を善くし、寶曆中江戸に遊び、關鳳江、井上金峩、澤田東江等と交り、安永九年歳六十四にして歿す。本書及び畫譚鷄肋の著は尤も世に推重せられたり。

一 書法發揮一卷 本書は、書法の要點二十餘條を擧げ、門人の間に

一 答へたるものなり。寶曆五年五月東宿澤致の序及原敬の跋あり。著者河原保壽は、松下烏石の門人にして書道の蘊奥を究め、書も亦元明諸家を宗として頗る雅致あり。保壽、字は子昌、中臺又鶴巢の號あり。天明三年九月十一日歿す、年七十。

一 汜上漫草一卷。本書は、和漢書道に關する故事を、諸書より抄録したるものなり。寶曆五年三月著者の奥書及同八年十月龜谷平震の序あり。著者詳ならず。

一 墨道私言二卷。本書は、和漢書道の故事訓話等に關する隨筆にして、奥書に、安永四乙未歲臘月念一日澤規道人識とあり。澤規道人は、細井廣澤の男九臯の別號なり。九臯、名は知文、字は天錫、縮齋と號し、書を能くす。天明二年五月四日歿す、年七十二。

一 學書捷徑一卷。本書は、書法の心得となるべき要項二十餘條を擧げ、書を學ばんとする者の捷徑に備へたるなり。安永七年宮田

勝虎の序あり。著者鳩谷孔平は、萩野喜内なり。名は信敏、字は孔平、鳩谷は其號なり。出雲の人、文衡山の書法を學びて其蘊奥を究む。文化十四年歿す、年百一。本書は其男信龍等之を編次し、門人藤山春韶校正して安永年中版行せるものなり。

一 東江先生書話二卷及附錄。本書は、和漢書道に關する故事逸話等を記し、附錄に法帖の選擇及書道の心得等を載す。著者澤田東江の門人橋本圭橘の輯録する所なり。明和六年五月圭橘の序及同年六月井上金峩の序等あり。同年九月の版本なり。

一 米家書訣一卷。本書は、弄翰、得筆、學理、楷書、行書、草書、隸書、篆書、榜字、總評等の十項に分ち、米南宮の書法を諸書より輯録したるものなり。享和元年七月柴野栗山の序、市河寬齋の跋あり。寬齋は米菴の父なり。米菴本書を著したるは二十四歳の時なりといふ。

一 狩谷掖齋手簡一卷。本書翰は、掖齋が書法の得失を論じて、竹村

茂雄に答へたるもの。委しくは其奥書に譲りて、茲に贅せず。
 一 臨池清談一卷 本書は、字源并大小篆、八分、隸書、章草、楷書、行書、飛
 白、草書、書法、書斷の十項に分ちて書法を論ず、卷頭に書法源流圖
 あり、版行せる年月詳ならざれども、天保十三年校訂者柳涯道人
 の自序、同十四年備後の門田樸齋居士の跋あるを以て見れば、蓋
 し十四年の版本なるが如し、述者、傳を詳にせざるも、其、紀伊、木元
 良の署名に見れば蓋し、紀州の儒家木村鳳梧の後なるべし、柳涯
 亦傳を知らず。
 一 猶ほ本册收輯に際し、黒川眞道氏其藏書の數種を貸與せられた
 ることを謝す。

大正三年十月

國書刊行會識

日本書畫苑第一 書部

目次

弘法大師書流系圖	一頁
✓ 麒麟抄	八
✓ 金玉積傳集諸額書次第	七三
✓ 筆法才葉集	七八
✓ 夜鶴書札抄	九七
書法式	一〇五
書道訓	一一五
入木道傳書目錄	一三八
筆道祕傳鈔	一四三

内藏頭
範忠

正五位下美作守
基範

已譯灌頂阿闍梨
弘乘

從三位治部丞
宣方

正二位權大納言
惟繼

寶金副院
賢悟

寺長東權僧正
定尊

正二位權中納言
長忠

佛頂院大僧都
尋源

法輪院大僧都
雄尊

山名孫八郎
時純

曾我刑部大輔
孝成

從三位
行經

正二位中納言
伊房

從四位上左少將
定實

從四位上官內大輔
定信

宮內權大輔
伊行

正四位下皇后宮亮
伊經

行成

從三位左京大夫
經朝

從二位少納言
經尹

少納言
行房

從三位三木
行忠

從三位
行俊

三木
行豐

天台座主
尊圓

青蓮院
尊道

祐助

道圓

天台座主
義圓

額色紙形、義政公家僕細川右馬頭持賢、其子彌七郎政賢、諏訪志摩守元信、其子兵庫頭貞秋、以上四人相傳受也、予於越前受貞秋之傳、

秋共

清四郎共賢
少輔一國齋
幽妙佐

式部少輔
贈正三位
信尹

正二位大納言
雅宣

權中納言
宗種

右系圖本紙、序ハ秀賢、葵滋ヨリ公任卿マデハ一筆也、定頼卿御筆歟、定頼卿ヨリ尋源マデハ多筆相交レリ、雄尊ヨリ秀賢成定マデ、行經卿ヨリ貞秋ノ小書ニ至ルマデハ、即妙佐老人ノ御自筆ナリ、可祕可尊々々、

此一卷者、唯授一人之系圖也、宮内少輔道芳、依大樹之仰、下向關東之間、云遠境、云繁榮地、旁以恐不慮之災難、與道芳相議、令寫留祕本畢、

麒麟抄卷第一 并序

夫筆藝者為末代盲聾之惠眼照義也無明長夜分照阻遠聞迷之燈火也然者傳龜龍八卦本有文、肇製書契而流累葉之世、合古言於筆端、露心地於紙上者也、自爾人起文清濁無為、了眼忽開、心性速直、紙翰墨國家為與、感生於才、筆形於言、是以學者得其德、背者無其藝、舊年之懷含筆前、萬端之詞載魚網紙名也、令叶金言感靈神、莫宜於字體、字體有六義、一曰筆法、二曰風情、三曰字義、四曰去病、五曰骨目、六曰感德也、然間義公攀上峨々蘭亭、久送季曆、遊翰林之臺、野公深閉幽々學憲、運涉日月、積入木之功、春感花鳥貫文之林、眇眇遮眼、秋明風月彈琴之響、戰々備耳、朝遊鑽仰槐林之下、暮望登雪翰憲之間、令紙翰墨而拾古言、勸為十卷、名之曰麒麟抄、

一硯相形事

以瓦硯為本、若石瓦硯之質、切、椽不造、只足計付用之、先師以之為宗、委細在口傳、石者紫石無數多色、面平均有赤色可用也、



硯四種異形、其樣可習也、

一墨摺事、墨何堅取摺也、無左右水差浸、狼藉振舞也、貴人前、左手吾前押當、以右手取墨、硯水際、墨付舉、硯面中可摺也、真厚、行少淺、草薄墨可摺也、殊消息、淺可磨、厚忌事也、何柔墨摺也、傳、有口

相樣堅可磨、



墨柄可摺、柄形不定

一真之筆、堅取、腕頸折、筆軸頭我額當、真物書身威儀、戒行可守、硯面墨厚、所能染可書也、筆染、質霖、兩狐如曳、尾可染、努々筆、塗、廻事不可有之、私、與、筆、何、同、事、

真物筆使事

岸柳枝低流、水如曳葉、



筆ノカタチハ柑子ヲ握ゴトシ、構テ堅ニ筆ヲトルベキナリ、五分、三分、柳葉、有ニ口傳、

懸針、逆鋒之點、頭指ヲ以テ、打立、肘ヲ引ナリ、
立、腕ヲ右ニ曳、

竹、是製杖之筆使ト云フ、頭指打立、腕頭以テ推也、
凡真物者、大指與筆之軸、十文字、遠、頭指與中指間、軸置一寸ニ取ノベ、腕頸操、可書也、真字習、五分、文字者、一寸五分可習也、本ナレバトテ、其字勢ニ習ヘバ、手跡縮後惡也、打立肩、折目捨所、文字大質似相構、鮮點一宛取放見、各々字見ル様ニ可書也、真之字白過為、本在、口、手本樣可隨好也、文字堅書、人以橫之手本教之、橫書人、豎成手本、以可教也、遲筆者早教、早筆遲可令習也、皆可通真草行也、傳、在口

一真物、手本見知事、橫堅筆使、皆柔爽シテ而固、點畫鮮而飽、每字見解書タルヨト見エタルヲ可為本也

筆注集云、文間書白、黑白等同、左短右長、文、



一真者、容貌好男、束帶體、元、

木

四方點是也、問云、心跡何様計可書哉、答云、字々如此、四方有ト知テ、點畫ヲ思樣ニ可遣也、横テ、筆ヲ強取テ、右ハ開、堅テ、細々ト少浮々ト可曳也、抑ノ之點、筆換筆、唯不可仰、ノ之點、腦木ヲ挿、如曳、右強走姿也、處可拂云々、五字寒熱病可去、

一寒熱病書避事、寒熱病起者、字長太、又對向點、遠之處、又一點不具太細之處、如此字皆以病也、書人云、字、片方、殊外太、片方殊外細、字名寒熱此病、書避事、對牛角筆使有、對牛角トハ、牛角切打達人云、字也、細之處、太之處、皆以同可書也、其體者、

牛角也



此牛角成天地而顯清濁、所謂清所成天濁所成地、善惡體自是出々

諸法親自

是為被、分、在、二、口、傳、

大筆結毛事羊毛木筆、彘筆、筆、皮ノムケ葉ノ開タル時ガ吉也、總強物ヲ以結テ可書也、

雲出



字ハ腕頭肩大身腰ヲ動シテ、筆又指ヲ操々舉、是名雲出、如此其形點ヲバ、一紙ニ充テ可書、是以自餘可得レ意也、

流烈



字ハ筆ヲ脚、筆ノ腹ニテ推浮々々、上等操開、軒雨ノ垂運落トスル如書、是名流烈、

麒麟抄卷第二 并序

夫筆藝者顯心性點畫者調威儀字體者現理體、如此三事相應之質、自元森羅萬像之源底、本覺常住之佛體也、然間長短依篇、延縮依點、未代書筆之藝、不得此意何殘累代之塵、歸本有妙理乎、

一行之物、筆軸大指之腹ニテ推テ、手ヲ少シ平、無名指ノ中節ニ充事、十王裁斷之記見エタリ、又筆、崎ヲバ左目當、緩々執行々書、心長者、榮花誇風情思、可習也、筆注集云、竹葉戰、燈火無際、私行物筆執事、無名指ノ中節ニ充事、異本無之、



燈火 燈火ノ無隨行ガ如也、

短虎龍ハ委ムクノト、内ハツヨク、外福々トシテ行々ト書開、行ト云、皮爪ハ筆ヲ打立テ、即開洩ス、横堅ニ切ノ點モ如此書テ、虎龍ト云、

行書ノ時ハ、懸針チ皮爪ノ點ニ書也、

麒麟抄卷第一 終

以諸本校正

一每字書習可、見覺事

字ハ指肘ヲ同時動仕、行ニハ、鼠針チ回懸點ニ書也、

上重下重、長短方圓、左狹右狹、八方直點ノ始畢、大小必定、廻絶、無有、見生類品云云、如此事能々口傳而可習也、又筆注集云、點見、點暗、左點見、右點暗、一二反習之後、字頭見書、下暗書、篇見書、作暗書、次第々々ニ覺様ニ可習也、

又云、一字一見一字暗、一字ラダニ書スレバ、其力以次ノ字ヲ暗ニ書見ニ、字形點角座席上字ニモ劣様可飯也、見書タルト暗書タル字ト、差目ヲ能々見クラベテ書直セバ、早舉也、顏魯公ガ云、每字有家體、字體二種云云、一字ヲ組合レバ家體ト云、點畫ヲ取分、每點字ニテ見ヲ字體ト云也、是ヲ本品共、又各々體共ニ云也、一手習有三種、一工夫之手習、二書替手習、三本體手習也、工夫者、手本ノ字形、點畫ノ力ニテ、我ト暗ニ工夫シ出シテ、思儘ニ書而異様不可有、書事候、書替トハ散

散手本、書覺後、我ト好様ヲ可書也、本體者、思様筆勢可書出、何異相可除也云云、

一四聲之字事、昔大師、道風皆平聲也、今法性寺殿、行能、以之手本ノ最上トス、上聲字、佐理卿御手也、字姿浮テハバメキテ、タビチ也、去聲字、一向異様也、入聲字、弘誓院殿ノ御手跡也、筆使強カタビタリ、此三聲習人ハ、手跡災難ヲ書出也、手本ヲ見ニハ、四聲ヨク、見ルナルベシトイヘリ、

一點角ヲ番名目アリ、筆注集云、天地人運命、財從息災長命云云、天字ノ頭ニアル點也、譬八點病冠、ナノ點也、地者字、下有點也、譬垂露生曲之點等也、人者字、中打點也、喻境點也、運命點、柳也、財從者、内重籠點之事也、息災點者、字ノ過所打也、長命點ハ、每點勢ヲ書也、皆是等ヲバ初心時ニハ、四方八方張、打立點、筆趣、何方ニ充ト、手本様ヲ見習、捨處、下何程捨ト見定テ、可習也、能々可尋、明師也、

一字點少字殊大事也、其中以ニ文字爲最上、其故若

縮疊 公文草二付、來文字、行
縮疊 二付、或字橫折目二付、

延推 江字作二付、編草二付、
恐草二付、

一四種ノ異形事、人形、龍形、鬼形、鳥形云々、人形者、蒼
公一文字、書之時、元氣起書、清成天、濁成地、清濁中生
萬物、萬物者人等也、人行住坐臥振舞、文字風情可書、
一點、內人肢腕膝足等書、一字中人五形書也、龍形者
筆使一點、魂打立所、龍三界貪法吞、鎌頭ヲ持立姿也、留
所ハ萬法納水體ニ可留也、鬼形者、鬼手代内、如一點可
書、一字姿二王ノ佛法守護、此類堂社ニ書也、鳥形
者、打立時、鳥頭可書、口傳云、鳥トハ鳥也、鳥ハ三國ニ
事、不思議ニ付、善惡告鳥也、如此儀付、鳥頭點用、此祝
之儀也、又遣迎共云、向筆、鳥ノ頭也、此由來ニヨリテカ
クナリ、

人形者、打立、脚免、
下地處、足懸、脚破、
體所推、懸念、

龍形者、筆ノ口
ノ口ト、而モ脈
細、細高書、如ニ
龍昇、可書也、

鳥形者、輕筆打立、
開押筆任テ、其體
鳥形ニ可書也、

鳥形者、輕筆打立、
開押筆任テ、其體
鳥形ニ可書也、

一半繪事、四種異形點ニモアルベシ、篇ニモ可有作又
可有、下ニモ可有文字姿ニモ有ベシ、文字ノ姿ニハ
額アル也、半繪者打立鳥頭、或下物姿書顯ヲ半繪云、筆
注集云、依二種無品、又二ニハ正直爲體、柔稜爲性、
形如吉祥天女神如、多門天云也、

頭

頭

一連筆者、筆崎ノ行所ニ懸目也、

色 逆迎 氣 逆迎 荷 持迎 仕 持迎 葉 上逆迎也
事 逆下 逆迎 叶 順逆迎 叶 順逆迎 叶 逆逆迎

一於一字之内有五形、

肩胸 尾

肩胸 尾

尾者、命點也、尾、
以相ニ長命云々、

一於字壬生二點、生正生タル姿、點字可書也、壬篇生タ
ルトイヘ共、作疎相書、篇劣死シタル點見也、又作吉共
篇ガ劣スレバ、片輪、選篇作每點留、心相構可書也、壬
點アレバ、相剋之有點云、生點生點ヲ書調タルヲ生文
字トテ、勝タル儀也、ヨクノ可心得有口傳、

一上點下點互借事

一上筆勢下頭事

異本ニ草ノ字ノ中ニ草ノ字ヲバ如此書、下ノ點ノ
頭ニスル様ニ續テ書也、諸事如此也、

一筆立ノ處可懸目事

筆ノ打立ノ處ニ目ヲ懸テ、捨處ニハ不懸
レ、目、筆ニ任セテ遣ベシ、次ニ點字ノ座席ヲ
見定テ可書也、

一筆堺之事 行ノ物成トモ、筆ノ堺ヲ
バ、隣ニ見セテ可書也、

筆持義 同上

同上

同上

同上

一筆納處事

飛廻義 折針義
虎尾義

同上

同上

同上

一筆絕事

逆逆義 同上

同上

同上

同上

一筆續事

連續義 助迎義
行草ノ字ニハ皆如此書也、

同上

同上

同上

一筆勢連事

昇龍義 蛇蟠義

同上

同上

同上

一於行字一點互諸字事

口方山回入十入元上ナ

凡行ノ物ノ點雨ニ、押開張開ノ種々ノナラヒアリ、
クデンスベシ、

一高平方圓者、文語便義也、文字ノ儂、數多、
又云、思々ニ可書、數能書ノ名ヲ不得時、如此不可書、

如何者手跡損也、

一依年齡次第可習事

高廿日 方卅日 圓四十 平五十者、義儂也、筆ノ功、功子、積テ
至極者、

平也、

一魚鱗事

橫魚鱗者 日具中點、天字、上點等也、

豎魚鱗者 一四字、點、口字等也、

點魚鱗者 一切字、補點、通居、點等也、自餘以之、
可准之、

一守表裏事



麒麟抄卷第二終 以讀本 校正

麒麟抄卷第三 并序

凡筆藝人、鏡居樓臺、心靜、心膺、恆、恆、筆墨之藝、積、積、薰、習、
之功、而增雲紙之色、故、筋、脈、備、字、體、無、乖、點、畫、之、枉、矣、
一草字、先、筆、橫、手、平、筆、崎、左、耳、當、行、々、可、書、也、草、書、心、
馳、醉、酒、者、諸、事、不、滯、心、以、可、習、也、筆、注、集、云、雞、距、當、紙、
如、折、是、名、入、木、云、云、
一草、物、筆、持、樣、

一寸五分



七分雞距



圓草者、秋草ノ行々ト有様ヲ
書アラハス心馳ナリ、
字ハ指腕頭肘ヲ同時ニ使トイ
ヘドモ、指數ハ多シ、筆ノコ
シヲ折テ書ベキナリ、

一草、筆、使、筋、骨、以、爲、面、肉、少、字、姿、細、高、而、優、成、以、爲、草、
大、體、行、字、爲、體、草、字、真、字、面、影、更、爲、忌、雖、然、以、正、直、爲、
本、體、以、柔、裏、字、性、姿、多、門、天、忿、怒、形、內、一、子、慈、悲、ア、ル、

ガゴトク、如此可得心也、

一草、字、大、姿、篇、與、作、事、篇、作、筆、勢、移、事、者、巖、山、兩、峰、古、藤、
ノ、ハ、ヒ、懸、如、可、書、也、凡、草、字、肉、過、事、ナ、カ、レ、賤、見、也、肉、懸、
事、行、字、可、限、也、

一、手、習、病、可、去、事、凡、通、異、草、行、二、寒、二、寒、三、浮、委、四、雜、
字、交、事、五、早、々、筆、使、事、六、肉、以、肥、事、七、五、形、不、具、字、八、私、
曲、好、異、樣、書、事、九、書、屬、字、事、十、立、凋、成、字、也、是、等、病、一、
書、不、可、云、能、書、者、也、

一於草字以一點可渡諸字事

イホリ

人

三水

角

各

了月ノ
作付

三頁 作付 一ツ字上 し之

一於草字可成諸字便事

行

草

有

放

相

要

口

高

田

中

通

此

心

易

風

方

水

以

通

水

守

方

一元之字、推直點ヲバ鳥、沙摩明王、足ヲ舉、魔如蹈ナ
ラシメヨ、ノ點之拾處ハ、片足ヲ以大磐石踏立タル様
可書也、如此書トテ、構テ暴惡ノ相ヲ不可有書事也、



雖然正直ヲ鳥體、

一額之堅之曳捨ヲハ、垂露ニ可書、イフ心ハ爲除火
難也、横之點打立、引捨ヲバ寶珠ノ點可書也、寶珠ノ
點者、貴賤豐饒ノ點也、



普通科斗點、
今垂露點也、



地濁土體
萬物能生體
天清空體

一額日ノ字ヲ書圓可書也、其故ハ圓滿之相ヲ表也、凡
諸字、筆使、柔輭可書、諸佛菩薩ノ慈悲ノ相也、



日輪圓滿之姿也、

一社頭之鳥居打額ヲバ、依神書也、雖然大體一也、其

故垂迹之時、住本誓蛇形、鬼形、龍形、鳥形可有之、飛
鳴宿食之様ヲ書也、付之八幡之額者、鳩姿也、使者成間
書事也、田舍社ナラバ、新八幡宮可書、祇園之額、鳥頭
ニ可有、鳥使者成故也、又何之額ナリ共、鳥居可打額
ナラバ、鳥形書、其故ハ鳥居トイフ名字ニ付而之儀也、

八幡宮

夫以額者、法身內證之德顯、萬民化度法曼荼羅也、而惡
書、寺社不限、其國其郡、損也、鎮西如權化之人、聖人來
長樂寺、額書、字姿髮亂童頭立様爲書、此額眷屬飛
多人、備事有之、是大師報給後失、其後道風書之、畢、委
細有口傳、

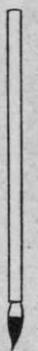
一筆動仕事、就筆折書分限事、但依文字ニ也、
一眞筆仕事、岸柳枝低流水、引、小粒夏毛、以結也、

一行筆仕、竹葉戰、燈火無隙、



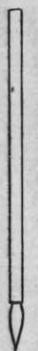
前同毛五分

一草筆仕、雜距當、紙如折、是入木名、



七分

兔毛是柳葉也、



一墨磨事、墨以聖花開、重成如可摺、

順逆雖兩訓、當家者內令摺、可依眞行草事、

一八訣、千金莫傳、



象牙



虎爪

一凡行字ノ習、流節ノ二様アリ、流者手本ノ大姿ヲ先、

學ビ、筆ヲ緩々ト使習也、初心之人ニハ、如此可教也、
次節者折目立ニ、神入テ強筆ヲ使ヲ云也、能筆ノ時者、
不可有沙汰之限、初心ノ人者如是習ヘバ、當座ハ強
見ニテ吉様ナレ共、後者手跡ヲ縮也、能々流ニ習セテ
後ニ節ノ筆使ニ可習也、文字正念出來也、是通眞草
行也、又云、花麗筋骨皮肉骨ノ習事、初心ノ時ハ、花麗
ノ姿ニ可習也、其姿ハ柔嘆成姿ヲ云也、去バ至極ノ後
者、筋骨ニ可書、筋骨ト者、神ヲ入ニ字形點角也、功不至
サキニ、筋骨ニ書ケバ、大文字等ハ自在ニ書ルレドモ、
小字ハ不被書也、而後ニハ皮肉骨々々ト並ベテ可
令習也、諸字ノ加風情也、有ニ口傳、

麒麟抄卷第三終 以諸本校正

分眞ニ書ニモ形吉有相應云々、文委雖見初心ノ時ハ、二寸ノ手本ノ字ノ草行ヲバ四寸ニ習ヘ、眞字ノ一寸ノ本ヲバ一寸五分ニ習ヘ、又眞行草ノ手本三寸四寸ニ成ヌレバ、筆アラケテ不被書仍不可習之、一二寸ノ眞行草可爲本、其習ニクキ字ハ、其本ニ増半分可習之、諸事以之可得意也。

一手本字可習際事

如所上云習テ後、大小ノ字ヲ書、透ナクシテ有愛爲際也。

一問云、手習ヲバ初心ノ時ハ、何様ニ可習哉、覽答云、筆開筆足筆納筆結、有此四名目筆開者、記云、虛掌直腕指齊、常ニ直ニシテ意在筆前云々、直腕者、直腕上下遣腕、左右遣腕、八方遣腕、文字ノ點、間ヲ不絶ニシテ、字内ヲ空ニセヨ、大ニ令習也、筆足者、筆ヲ横筆ニ立、八方仕、裏ノ方ハ薄、表ノカタハ黒ナル、横堅ノ點、打立筆崎、左向、留所右留、如此八方ニ筆ヲ使フ、書所、有口傳筆納トハ、留所ヲ何度モ可返歟、但依點也、去

ナガラ、返サデモヨキ也、打立處ハ、裏筆仕、此有口傳道風ノ手跡字如此、筆結者、筆浮テ緩々トツカフ、是ハ筆功之至歟、
一大字習可能事、大字ヲ習ニハ、折目肩、打立捨所ニ筆勢ヲ調、習ヘバ鮮ニ見エテ、而有德、小字者、筆勢不見、故雖習無德也、
一太細習否事、記曰、毫肥則爲鈍、瘦則爲露骨云々、雖爲文見、自本少可、太習習得之後者、本與新字等、可書也。

一強弱可習否事、夫筆者以卷結爲吉、書者鏡成故也、留心而不馳、待翰實不留性、下毫則柔引之、急ナレバ、燕拂、開則筆緩、開拂中指操、頓點、曳登則云上、腕暫振、筆腕頭ヲ降、則言流波、腕ヲ震開之、抑則云春霞、橫點、漸舉、筆折指觸、則折目ヲバ云、巖角、彼是爲字、凡以筆如拭紙上習之、古賢曰、幼稚時、筆緩、短、可取筆云々、
一遲早筆可習否事、遲筆書之、則字間鈍シテ如暴惡、

墨子ガ悲アリ、早筆書之、則風吹如電光、韓公ガ恨アリ、然者不急、緩量之可習之、

一手習スルニ不似文字、強ニ似ントスレバ、手損也、其字計ニ退、幅物ウシ、一兩度モ習テ増ヲバ、其文字ヲ暫開テ、別ノ處ヲ可習、又立歸テ先度ヲ可習ナリ、一手習早習人ニハ、遲教ヘ、遲習人ニハ、早可教也、

一懷中祕密云、重云、抑先、手習者、手本ヲ可讀、其手本云、昔ノ能書之人々ノ手ヲ云也、其中ニモ三宗ヲ以、日本ニハ、尤勝タリトス、其次第ハ、弘法大師之御手也、假名此人ノ書始、給ヘリ、小野道風、佐理卿、行成ノ御手、此三人ノ御手ヲ可習也、初心之時、眞名ヲ習ヘバ、必退、幅シテ手習、倦然者、偏假名ヲ習、ハン程、筆ノ器量アラバ、後ニハ、眞名ヲ可習、故假名眞名ノ下方ニテ、眞名ニ筆ヲ得ツレバ、假名ヲノゾカラ書ル、ナリ、

一文字習、有病事、性靈集云、翰跡筋骨、每點、松悲、翰墨紙行、寒松病枝、愁云々、先上句、私曲ヲ好テ、筆ヲ狂シテ爲病筆ヲ思、様行々ト可書、次句、手本ニ似セン

似セントスル間、文字肉モナクテ瘦タル姿ヲ云也、福福ト可書、依之強弱奇置々々ト可習、相構々々テ、命終マデ不可忘、本形、雖然風情ヲバ、可加也云々、

一潔福筋潔者、眞也、文字ノ點ヲ切、續、潔、間、賦、白、墨、等、分、可書、但有口傳、次、福者、行也、肉ヲ懸ヨ、内ニハ、骨ヲアラセヨ、筋者、草也、筆ヲ眞ニシテ、然モ筆ヲ草ニ、無肉書、是草ノ字ノ眞ナリ、

一手ヲバ本ニ向テ、急習ハンヨリモ、手本ヲヨクノ見覺テ、可書、所謂上重下茂、長短四方圓、左短右長、書點之終、鳥之翅ノ形、カヤウニ是ヲ覺テ、習ヘバ、安上也、覺テ後モ不忘也、

一手習雙紙之事、觀音殿、云雙紙ハ、紙數ヲ重テ、柿ヲ以、イタメテ、文字五六行計、書程ニ切重テ、金漆ニテ塗テ、上ニ朱ヲ指テ、其上ヲ以、漆卦ヲ懸テ、其後ニ數枚ヲ重テ、上ノ端ニ穴ヲ徹シテ、紙捻ヲ以、タ、リテ、持、手、可書也、五ノ徳ヲ備タリ、

一虎屏風ト云雙紙事、檜木板ノ白ヲ薄ヘギテ、削ミガ

キテ、下上ニ縁ヲタテ、二三行書ホドニ、長サ一尺計十枚程ヲ妻戸ノゴトクホゾヲ作り、カラクリテ如屏風、金漆ニテ塗テ、持テ可書、是有五德、
 一唐之妻戸ト云雙紙事、鴨居ト敷居トヲ、方立トモニ造テ如妻戸ニシテ、圍開ヲスル様ニシテ、方立ノ下ニス、シノ絹ヲ張テ、戸之裏面ニ白漆ヲ塗テ、其上ニ立卦ヲ懸テ、片戸ノ裏ニハ、二行計ノ中、黒漆ヲ以テ之發句ヲ、片方之上ニ、何之銘ニテモ書テ、長サ一尺計廣サ七八寸計ニ書也、是備十德也、
 一角紙事、山樺灰ヲアクニ厚クタレテ、牛ノ角ヲ器ニ削入テ、件ノアクヲ以テ、唐蓬ヲ薪ニシテ煎ジテトロト、吉程煎ジテ、厚紙ノ能々打タルヲ引重テ板ニハリ、照日ニ毎日四五度モホシテ、字ノ通ランホドヲ計テ見レバ、薄クハ七八度十度バカリモ塗テ、其後二三十日ホドヨキ日可干也、
 一又松脂ヲ十分一成ホド煎ジテ、水ヲ絹ヲ以テ徹入取上テ油五分一、此ヤニヲ合煎ジテ、槍ノ木ヲ入テ見レ

バ、ニジマヌホドニ煎ジテ、白粉ヲ少入合テ、ハケニテ打タル紙ニ、如前ヌリ干可書也、
 一又牛ノ角ヲ、ヌタヲ削捨テ内ヲクリ、鉤ニテ無村削テ、常思草ノ實ニテモ莖ニテモ煎出シ、吉酒ニ入合テ、件ノ角ヲ、片方ヲ引破テ、器ニ入テ煎合テ、緩々ト成、鍛治ノ箸ヲ以テ引干可磨、如札重テ可習也、
 一手本ヲ習德失事、夫雖似文字、不似筆勢、雖似筆勢、不似字體、就文字其德失アリ、其德者德有二、一習字、半繪等書顯、爲德二習筆勢、故得筆云也、失者文字何習共不似云失也、習習者處ヲ捨可習ナリ、返テ以テ、又筆字力ヲカケル也、又筆ヲ仕ニ有德失德者聞有、失者有、不聞、失有二、一習苦點似トスル程ニ手縮、二退屈ノ心アルヲ失ト云、筆ノ失ニ目ヲ懸テ、心ヲ廻シ可習、早々ニ雖書筆ノ失ヲバ心ヲ靜テ可書、難失者一字ノ内ヲ九品ニ可書、九品ノ筆使ハ口傳アリ、
 一折洗連筆仕事、折者打立折、角ヲ折捨テ、折損故、眞ト云、洗者肉ヲ懸筆ニ際ヲアラセズ書ヲ行ト云、連ト

者、筆ヲ不切、本末平等カキ續テ草ト云也、

一手本善惡可見様之事、筆注集云字筆形神吉ラント、神形衰タルト、其善惡アルト云々、雖見文、其文字ノ一字ヲ見時、八方ニシテ不鈎、柔輭成ヲ爲本、又一字ヲ取放テ見時、各々ノ體顯直成ヲ爲本、筆崎圓ニ見ルヲ爲吉、或十八形、或十六形、或六十四篇、或漢土ノ十二様、如此形ヲ書交、各々ノ體ニ直ニ見テ、以爲本、又眞行草手本ノ善惡ヲ見事、眞草筆ニ下ツテ、墨之裏表ナキヲ爲本、點畫者堅ニ柔軟成、爲本、靜ニ書タル様ニ見ユルヲ爲本云々、

筆注集云、文間、普白、黒白、等同、左短、右長、文、間、普、白者、點、間、點、太之程ニ、間ヲ明ニ、白、黒、等、分、成ヲ爲本、八方左、狹、右、狹、直ニ見テ、爲本、是、眞、也、行、筆、ヲ、圓、カ、ニ、福、ヤ、カ、ニ、仕、自、眞、肉、ヲ、懸、點、ノ、間、ヲ、鮮、ニ、見、様、折、目、ヲ、圓、ク、折、捨、處、圓、ク、捨、テ、少、シ、筆、ヲ、橫、筆、ニ、仕、フ、是、ヲ、爲、本、草、者、打、立、圓、立、少、シ、本、末、平、等、成、様、ニ、見、エ、テ、柔、輭、也、筆、ハ、横、筆、ニ、仕、遣、迎、送、迎、ヲ、書、テ、見、ル、ヲ、爲、本、眞、者、筆、書、テ、質、ハ、

束帶シタル俗人ノ、座敷ニ著タル様成ヲ爲本、行者直ニシテ、女房ノ絹刷タル様ニアルヲ爲本、草ハ強シテ、男ノ舞マヒタル様ヲ爲本、凡手跡ヲ見事、重々多具不及註、諸事以之可意得也、

一文字ノ送迎之事、點ノ送迎之事、筆注集云、草ニ字之送迎、行ニ點ノ送迎、連絶續故云々、上句點之送迎可有、字、送迎アルベシ、點ノ送迎ト字ノ送迎ト者、上ノ字ヲカキ捨、點下ノ字、打立點ヲ可送迎、縱者點墨清、迎上點書ハ、能書致、處也、次句送迎者、一點ノ送迎ト一字ノ送迎ト可有之、一點送迎ハ、槍所打立處可送迎成、一字ノ送迎トハ、如上云終句者、連絶續連者、眞行草共ニ書ヲ云也、絶ハ送迎ニ如上可書之、續トハ、三字書續テ打點書、上委見エタリ、

一筆使事、道風曰、筆ヲ墨ニ湛々ト染テ、筆ノ腰ヲ折、軸ノ頭ヲ強、取テ、筆ヲ平メ可書、儀有、又或祕書云、筆ヲ墨ニ飽マデ合セ、軸ノ頭ヲ取テ、緩々ト可書也、初メ筆ノ腰ヲ折書者、初心ノ儀也、但墨付之、貴賤書顯時、腰

ヲ折テ書ク墨付賤文字肥テ鈍也、下主シク見也、次ノ儀者、緩々ト書者、墨ヲ薄ク摺テ、筆ノ崎ヲ以紙ヲ如巾、可書是ハ墨付尋常ニ貴也、問墨付上簡下主ノ差別者何體哉、答、上簡之墨付者、如上云、薄墨ニ點シテ、軸ノ頭ヲ強取テ、堅様ニ立テ緩々ト書、墨付兩方ノ端際勻々トシテ、自傍見時者、紙ヨリ高見え、正方ニテハ紙底ニ傷込裏ニテハ、墨付左字ノゴトク、墨兩方ニ鮮也、是ヲ入木ノ沙汰ト云也、如此見エ、墨色少青見ルヲ爲上品、又匂心疊メノ所マデ鮮ニ見ユル也、下簡ノ墨ハ、黒ツキテ、所々ニ墨消テ、墨ノ兩方ノ端、紙ト墨トノ際不鮮、筆崎挿、紙ニシミテ見ヲ爲惡也、仍墨付之善惡難書、可依紙加階歟、又消息ノ合點之返事ノ時者、合點之下細ニ、如上云、薄墨ニ可書、人ノ消息ノ薄墨成時者、少墨摺テ可書、是人ニ能々見セン爲也、一得筆加風情事、筆注集云、得能書名加、風情得背者、覺讀異儀、雖然是證得、貌ニシテ、好私曲、忘本願、任心書故也、又云、無儀無由如乞巧人、委雖文見、命

終マデ勿忘本、一文字ヲ書新筆、使事、點筆暫置テ可書、不然則惡也、堅取テ每點初春、橫點ヲ打立、卷様ニ書ヲ、名雲卷、堅點打立ヲ、筆崎ヲ内ヘ向テ突様ニ、急ニ緩下方ヲ名、敵手、新筆ヲ以冠筆ニ書、冠筆ヲ以テ崎有様ニ書ハ、少シ平メテ柔ニ、打タテノ所ヲ、急ニ捨處ヲ切崎ト名ク、此レノ點ノ捨處ノ事也、靜ニ捨時者名、輕昆、只冠ザル様ニ書ハ、能筆ノ至也、初心ノ時モ如此可書、一付大小字、腕肘、副身不副消息事、筆注集云、草字ノ消息ヲ、臂ヲ身ニ放、草字假名字ハ、肘ヲ身ニ付テ可書、眞ノ字ヲ、机ニ付肘、一切ノ字ヲ書ニハ、直ニ筆ヲ堅ニ書バ、尺大字也、消息ヲ、筆ヲ平メ、折筆、腰筆ノ軸ノ頭ヲ強ク取テ、臂ヲ後ヘ廻シテ書、次ノ文ニ見タリ、然共緩々ト筆ニ任テカク、次ノ文ハ、正ク字ヲカカムタメナリ、終句ノ直ニ立ル筆者、立ル處ヲ嗜ム也、用筆者在心正、心正ケレバ、即筆モ正シキ也、又手ヲ習

ニハ、身ヲ端正ニ坐シテ、料紙ヲ卷テ手ニ持テ、手本ヲ机ニ置テ、如寫可書、初心之時者、紙ヲ數多疊テ太習ベシ、得自在之後者、字加風情也、尺ノ字ト者ノ點ノ儀也、ノ點ヲ、臂ヲ開キ、又草ヲ書ハ、字ノ堅點ヲ、臂ヲ身ニ副曳キ書、以此等大小ノ字心得可書也云々、一文云、稱略、依下字者、上ノ字ノ點滋時者、下字點ヲ略、上ノ字ノ點ヲ略シテカク時者、下ノ字ヲ草ニ書、消息一行ノ内ニ、三字ヲ、行ノ眞ニ、次字ヲ、行ノ草、次ヲ草ノ行ニ書、次ヲ草ノ草ニ、次ヲ、バカナナドニカクベキ也、又消息ヲ、バ何度ニテモ、首ヲ、行ノ眞ニカクベキ也、染筆書一字之時者、何度モ正字ノ體ニ書舉テ、三處ハ、筆ヲ一度染テ書時、如此書ガ吉也、何度モ句ノ頭ニテ筆ヲ染ベキナリ、一消息、墨摺事、薄可摺祝儀也、濃摺時者、調伏儀也、相構相構ウスクスルベキナリ、一墨、續事、飛鳥落花村紺可續、三字五字七字可續也、筆注集ニ云、黑白並雜ト云リ、墨ヲナラベテツグベカ

ラズ、一消息ノ風情者、筆ヲ嗜テ而不嗜、不捨而可捨、點少行ニシテ、中ノ點ヲ、略之、外、都ハ正シテ不正、即言便ノカクベキナリ、一於消息者、打捨者、點ノ打捨、文字之終ノ打捨、二可有、點打捨者、文字ヲ長カラシメ、ムタメナリ、字ノ連ノ打捨者、文字ノ懷ヘ書著、下ハ、連筆ユラメカシ、打捨時者、筆ノモヒラメ、バ自然點大也、不可此難書返所ミ、打捨有口傳ベシ、一消息、堅點事、初ヲ、懸針之點書、中ヲ、虎爪ニモ書下ヲ、生林ノ點ニ書也、又々、秋ノ秋、如此等ノ字ヲ、下ニテハ、生林ノ筆使、可有口傳、一消息之眞行成事、凡文之體者、詞續テ文字ノ書様ヲ以、人ノ善惡ヲシリ、行ノ上下墨續ヲ見テ、知貴賤事也、相構眞行ニ可書也、如此書好、常稽古シテ可書也、書札禮義抄、玉章ノ祕傳別有之、一消息書飛鳥落花村紺ト云、

島かくれゆく
ふねをしそおも
七
六
一

藤花者五七五ノ句一行、七々ノ句一行、是ヲバ頭ヲヒトシク、下ヲ不同ニ朗詠ノ歌ト懷紙ヲモ如此書ベキ也、
奥本ニ題册ニカキテ、
是ヲ二行木立トモ云フ、

ほのくさあかしの浦のあさきりに
しまかくれゆくふねをしそ思ふ
五
七
五
七
七
五

はるくさぬる
つましあれは
七
七
五
七
五

木立者、是ハ初之如立石雖書散字ノ數ハ各別也、假者、初ノ句ヲバ七字一行、七字一行、三字一行、次句ハ七字一行、五字一行、二字一行、是ヲバ三字二字充、餘タル質ニカクベキ也、
是ヲ六行木立トモ云フ、
やをかゆくはま
のまさことわか
こひは
いつれまされる
をきつしま
七
七
三
七
五
二

立花ノ様

或又立藤花ノ様ト、分秀石ノ様ト二様アリ、立花ノ様トハ、上句九字一行上テ書、八字一行下テ書、下句七字一行上テ書、七字一行下テ書、四行ノ行首ハ不同下ヲ齊ク書也、次分秀石ノ様トハ、十二字一行、八字一行、七字一行、二字二行、

かすかの、わかむら
九

さきのすわころも
八

しのふのみたれ
七

かきりしられす
七

分秀ノ様
かすかのにわかなつみつゝ、
十二

きみか代をいほふ
八

こゝろはかみそ
七

しる
二

らん
二

以上雖事廣ニ様ノ書様迄ト云云、
一歌ノ墨續ハ上句一度染、下句ニテ一度可染總ジテ詩歌トモニ、二染ヲ吉トス、下ノ句ハ上ノ句ノ半字下ヲ可書也、
一艶書ヲバ、面ヲバ上ニ云所ノ立石ノ如ニ書、裏ヲバ木立ノ如ニ、行ヲ寄テ可書、字ノ數ハ飛鳥落花可書、初ニ木立ヲ一行、墨ガレニ細ク連テ可書、次々ヨリ墨

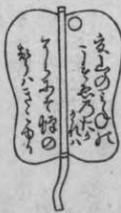
ヲ點而黒方下ニ可書、飛鳥ヲバ假名真名ヲ交テ可書也、真名ヲバ一字ヅ、乍去可依字、奥ニ留所ヲバ、二字ヅ、一行ニ書也、イカナレバ、鴛ノ一番居タル體也、落花ヲバ一字ヲ太ク、次ヲバ細ク、打交々々可書、艶書ト申モ、歌ノ様ヨリ事與テ書間ニ二枚ノ文ヲバ、始ノ文一枚ヲバ木立、其間飛鳥落花ノ様トテ散々ニ書散也、裏一枚ヲバ、木立ノ亂レタル様ニ亂シテ書散ス也、
喩、
なぞらへ
てもしやう
かひのさた
めなき
さまをかなしみ
おくそ
花の春
あなか
はなかなき
ことなけき
ごり邊
やまのゆふ
けふり
あたし野のあし
たの露によそへ
うき世
のはかなき
ごり邊

是ハ面ノ一枚ニ可書様也、又裏ノ一枚可書様アリ、一假名書事有二種、二者鷄尾ノ様、二者絲柳ノ様、始ノ

鷄尾ノ様者、ユラ／＼ト鷄尾ノ風ニ吹レタル様ニ可
 書絲柳様者、柳ノ枝ノ風ニ如ク吹靡可書、
 一扇ニ物ヲ書ニハ、繪アラバ其心ヲ可書也、繪ノ所ヲ
 可除、又主ノ扇ヲ給テ、戀ノ歌、別ノ歌等ヲ、不可
 書、祝言ノ歌、可成疊目折目ニ不書、但可依體也、其
 故ハ一條院御時、扇合之有ケルニ、唐紙ノ大骨ニ張タ
 ルヲ、面ニハ真ニ、裏ニハ草爲被書、烏ヲ殊ニ御祕藏
 有ケレバ、隨事可書也、



一團ニ物書様之事



是等之大事相構々々人ニ不可見、若見成者返々筆硯
 童子之御罰ヲ蒙テ、永可斷佛果也、穴賢々々可祕可
 祕、

麒麟抄卷第五 終 以諸本
 校正

麒麟抄卷第六

先硯事



息災中者高、端
 香回也、踏面云、
 馬蹄石共云、
 調伏之石也、
 孟池石云、
 諸事凶也、



増益
 臨池石共、含
 清石共云、
 敬愛、喻へ、
 孟宗石共、
 池石共云、

一墨摺口傳者、先順廻シ、次逆廻、後中ヲ破云云、分
 限ヲ計テ可摺也、中成花ヲ以テ真書、水際近處ニテ
 行ノ物ヲ書ク、少水ニサシヒタシテ草ノ物ヲカクナ
 リ、
 一逆鋒點口傳者、此點起ハ、天照太神逆鋒下海中ヲ搜
 給、鋒露滴テ淡路國成、從其日本國ハ始レリ、是ハ大日
 如來不動現、劍下、混沌之堅點ト成、清者上爲天濁者
 下爲地、是劍形體也、

右銀點



左銀點

一眞字者、十地云事可得、意也、是通眞草行也、眞白勝
 書行、物黑白等分書、草白勝打交、打交可書也、喻者、



一手本見、口傳者、四聲之文字アリ、去聲上聲入聲平聲
 ノ字也、如此其角ニ肉ヲ少シカケテヨク書也、平聲ハ
 少平字也、大師、道風之手如此、
 一八方點口傳者、眞物手本推縮開記書之、能々明師
 可尋、
 一牛角口傳者、天地成、
 者石也、
 一人ト云字ノ順逆之口傳者、是理智因緣ヨリ起也、前
 牛角口傳、同事也、順ノ點者、萬法能生之姿也、逆ノ點者
 能納之姿也云云、

一顯生類品者六十四篇道風十八形、佐理ノ十二様等ノ家々ノ手書得物可_レ口傳也、
一諸事加風情者、點形字形一々習畢、其後我カキ度様ニ書ナリ、

一文字筆使事付九品ノ姿、橫豎四方八方、折曲廻捨返推遣卷繼萬字ニ渡義事



一者始之義也、又本有字也、本有者地體也、地體者_レ丸字也、_レ丸者森羅萬象出生スル法身體也、一者開ト云讀アリ、開者清濁二體也、森羅萬象其中ニ露_レ丸字者自性

曼陀羅之種子、諸字ノ打立ノ始也、能々一文字ヲ可習也、萬點此筆仕一納也

灑 眞眞也打立、稻米點也

灑 眞行蚪、點可有

法 眞之草行圓、形點可有

法 龍形也臨池、論ノ文也

法 草行、點アリ

法 行草吉ノ、點有

注 十連者鈍體也、此字ニ加増少落ノ二義アリ、加増者點多、少落ハ點少

注 五急者早書タル姿也、點ゴトニ點ヲ略シタリ

注 五出者橫豎之點出長也、短ナリト云也、長ナリト云ナリ

點 十藏者點ヲツメテ書タリ、勢ツマヨリタリ

是 又堅之點ナ書、長ヲ十起ト申也

是 五伏者堅ノ點ナ短ク書ク也

所 又堅之點ナ書、長ヲ十起ト申也

所 五伏者堅ノ點ナ短ク書ク也

一一點對之口傳者、假令堅ノ點モ橫モ、一字ニアマタ書重ナル時、一樣ニハ不曳也、噓

下向反卷 諸字 此字ニ委見タリトイヘドモ、但筆ノ打立ノ義ナリ、左ニ向時ハ、右點ヲ上下ト堅 如此 有向也

一壬生口傳者 同者兩點ナレ共、愚ニ書タルヲ壬トイフナリ

一行物之點角口傳有者、詩之手本可_レ口傳也

一額ヲ書ニ鳥居付有口傳、鳥居ハ、天ト云字也、此天云詞ハ、兩界ニハ、皆_レ天ノ儀也、金剛界智法身天也、遮劣得澄之儀也、神者衆生化度之故、三熱可有昔寂光本覺ヲ、依智法身而覺悟シ給也、此字ハ、天ト云處ニ向ヘバ、我本體ハ、毘盧遮那佛ナリケリト悟出シ給故ニ、鳥居ニテ垂迹シ給也

一額之口傳者、此額ヲ天狗權化之人ニ現ジテ、來テ書之、諸人ヲ魔道ニ引入ケルナリ、今モ惡ク心得テ書之、可有亡國之相ナリ

一入木名事

手習トハ、不云入木ノ沙汰ト云也、入木トハ、大師於異國青龍寺、眞言學問有ケリ、雜司ノ尼數萬人ノ僧ノ齋

ヲ、居ナガラ飯ヲ以テ鉢へ投入ル、ヲ、大師御覽シテ、不思議ト思召テ、彼尼ニ何術ヲ以テ、箇様ニ投入ゾト被仰ケル、尼答云、術候吾ニ口傳サセヨ、尼答云、手本ヲ書テ給候ナンヤ、安事ト有仰、廣サ二寸、厚サ五寸、長サ一尺ノ木ヲ小刀ト取合テ進之、大師取テ削給テ後ニ遊バス文ハ口傳云、其本云、我心自空理無、尼給テ、刀ヲ以テ此文字ヲ削ル、文字ニ寸五分入テ、殘ハ不入、其時尼是程ノ手ハ、異國ニモ能書多候、大師力無シテ、歸給、或深山ニ行テ、窟ニ閉籠、百日御手習有ケリ、自其百日手習始レリ、義公云、百日習ヘバ、驗アリ、一年習ヘバ、文字ノ姿出來ス、三年習ヘバ、能書ノ名ヲ得云、爾大師歸給テ、尼ニ手コソ上リタレ、汝ガ術道ヲ、教ヨト仰給ヘバ、尼安程ノ事ト申テ、如前木ト小刀ヲ取出、大師執テ削リ、如前書給、尼給テ又削、此度五寸木ヲ徹ル、尼申サテ、如此功ヲ積バ、木モ徹リ飯モ投安シト申、入木ノ筆使トハ、蛸蚪ノ如ニ書也、其筆仕者、一骨目筆仕事



如此筆仕ヲ入木ノ筆仕ト云也、沙汰トハ議評定シテ書ヲ沙汰ト云也、此等ハ草ノ義也、如此習ヘバ小字ハ書ル、也、大師如此心ヲ以テ見給也、



儀軌云、辨才天頓蛙躍時、白蛇蟠退云云、草ノ筆仕ハ、鱗龍ノ蟠姿ノ如ク書、點角ヲバ、蝌蚪書也、是ヲ半給ト云、蝌蚪ニ順逆ノ點アリ、橫豎ノ蝌蚪折目科斗、植點科斗、捨ヲバ、蛇尾ノ點アリ、餘ニ事ゴトシク見ユル、額ナンドヲバ、如此可書、爾レバ科斗筆仕ノ心、筆ニ持セテ可書、是ハ字ノ神ト成也、蛙游、橫豎、蛙背ヲ結テ、鱗龍

ノ蟠レル姿、如此永合テ一字造レバ吉也、



頓蛙躍時、白蛇蟠退云事、白蛇者辨才天也、南閻浮提、福種子、貧報吞間、大日如來不動現而惡魔ヲ降伏、又不動辨才天現、貧報降伏、是衆生化度之故也、然文字者辨才天種子曼荼羅也、筆者辨才天三摩耶形、硯者龍池、辨才天之居所土也、此三種取合、不二一體成處、筆硯童子名付也、去者假不淨ニ、硯筆墨不可取也、墨辨才天五色曼荼羅也、一筆硯童子真言云、普印、

一日手習事、先一日見、二日習、三日問、四日了、簡五日書、第六日可捨、本七日暗書見、八日見本品、九日行

住座臥懸心、十日不見本、得字神也、如此打返、百日十返可習也、是ハ上根人也、大師、黃之、道風等也、中根、五百日、佐理、賴行成、賴等也、下根者、千日ヲ可限、今ノ我等也、

一文字之勢書事、道風破子書云、虎子入千里、萬方外、成念力云、假令文字小書、其字形點角、額書、勢力書也、喻如、獄中駒、字コソ小トモ、十方ニ念力ヲ行事、ヨクヨク可思、

一文字ヲ作始事、文殊ハ七千字ヲ作、龍樹ハ三千字ヲ作、蒼頡一萬三千七百五十七字ヲ作也、西州者、甘萬字有、覺語也、以上、閻浮提之内者、二萬三千七百五十字アリ、一昔伏羲王ノ時、元龜龍馬負文字來、其龍馬、八卦記事ヲ得タリ、其時ニ鳳之羽ニ、此字ヲ伏羲王寫給フ、其ヨリ以來、陰陽ノハカリゴトヲ得タリ、此抄ヲ名、麒麟、依、此龍馬也云、

一伏羲ヨリ後ニ、神農黃帝ノ時ニ、八卦ノ字ヲ和テ、蒼頡ハ、山海ノ遠近之境ニ入テ見テ、任運ノ文字ヲ作ケリ、古文ノ字、任運ノ字者、巖窟、枯木等也、又ハ、魚鳥跡等

也、所謂一萬三千七百五十七字也、

一漢字ハ、秦始皇之時、程邈ト云大臣、蒼頡ガ古文書ヲ預ケ給フ、火難來テ燒、此書、難而程邈被禁獄、欲死、無力、蒼頡ガ古文ヲオモヒ出シテ、和ケテ、今ノ漢字ニ作、始皇、欲覽之、我汝ヲ不禁獄、世大道廢ナン、此漢字ハ、爲愚者有便トテ稱美シ給ヘリ、サレバ、漢字ヲ、秦ノ世ヨリ始トテ、秦ノ字トモ云、隸字トモ云也、今、眞字ト云ハ、依主釋盡義也、程邈ヲ隸大臣ト云、此内ニ口傳アリ、西域、二卷、北天竺之、寶陀國、當大石有、高六十也、其石面當來、導師釋摩佛、漢字ニ書、此佛、七佛以前佛也、其時者、過去莊嚴劫佛也、故漢字者、從過去遠々アリト可云、此故、隸大臣者、佛之變作歟ト云リ、

一蒼頡者、黃帝ノ臣下也、軒轅皇帝姓、公孫王タリ、雍州ヨリ、西ニ、一百八十里ヲ去テ、金香城有、香支臺ト云樓殿ニ、居字ヲ作リ始タリ、

一黃帝ノ時ニ、天ヨリ、龜甲落テ、六ニ破タリ、黃帝見之、七種之政、シ給フ、一陰陽、二占道、三算道、四術道、五醫

麒麟抄卷第七

一筆法之序一有六義、

一筆法 筆ヲ取り順逆ニ使等事也

三字義 依點點之儀ヲ求

五骨目 急緩之筆、使等事

二風情 點ノ風情、字ノ風情

四去病 突熱病等事、伏義ヨリ以來、道風ニ至迄、奇妙之事アリ

六威德 伏義ヨリ以來、道風ニ至迄、奇妙之事アリ

昔王逸少、或酒屋ニテ酒ヲ典テ歸ル、酒ノ主酒手ヲ乞

時、壁ニ書タリト云云、家主ガ見レバ金ト云字也、文字

ノ程ヲ薄削テ賣ルニ、莫大ノ直ニ賣リ畢ス、其酒主藥

クナリス、

一神ノ字八田示ストモ、日本記云、天照太神者天岩戸

ニ閉籠、下界へ無出給是ヲスカシ出シ奉ントテ、手力

雄ノ大明神岩戸口天照太神ヲ奉懷、八人神ハ神樂シ、

二面之鏡ヲ神ノ上ニ懸テ舞給フ、下界群ノ音天照太

神ハ聞召テ、細目ニ岩戸ヲ開給フ、御光二面ノ鏡ニ移

ル此世界赫奕タリ、手力雄尊神ヲ懷取奉、八人神八田ヲ示給ヒ候以來、神共ノ事ヲシメス、一異國牒狀之事、利劍之姿、可書是ヲ、降伏ノ故也、調伏之義也、

藤狀云

一筆ノ軸ノ寸法之事、真ニハ四寸五分、行ニハ五寸草ニハ五寸五分也

一硯ノ寸法ノ事、道風之瓦石四寸九分也

一机事、高八寸八葉蓮花也、長二尺五寸、廣サ一尺二寸

月也、初心之人ト幼稚之人ニハ、盤ノ上ニテナラハスベキナリ

一筆ノ毛ノ事、手跡弱ク習フ人ニハ、冬毛ノ強ニテ結

又夏毛ヲ以テ可結、強習人者毛ノ弱ヲ以テ可結、大道

風ノ好ハ紫毫筆ト云、末代難有和成所ヲ薄ク懸テ、又

兔ノ毛ヲ薄ク懸テ、以上五重迄緩々ト懸テ、委ハ柳葉

ニ結テ、真ノ物ニ可使、行ニハ、秋毛ヲ心ニ立テ、上ニハ

冬毛ノ和成ヲ懸交テ、委ハ如筆、草ニハ妻鹿ノ夏毛ヲ

以テ可結也、佐理者、真ノ物ニ者兔毛ヲ心ニモ上ニモ

懸テ、筆ヲ長ク好ミ結也、行ノ物ニハ、秋毛ヲ心ニ立テ、

兔毛ヲ薄懸テ、上ニハ冬毛ノ和成ヲ懸タリ、草ニハ冬

毛ヲ以テ一向ニ結也、行成ハ真物ニハ、兔毛ヲ以テ心

ニ立中ニハ毛ノ和成ヲ懸、上ニ者又兔ノ毛ヲ懸タリ、

行ノ物ニハ、秋毛ヲ心ニ立上ニ冬毛ヲ立タリ、草ニハ

一向ニ冬毛ニテユルノト結ナリ、

一工夫手習事、宗弘禪師ハ、手習ヲ廿一年迄染肝習給

ヒ、工夫ノ詩作り給也、

先須靜心、餘莫追尋、春花秋月、或浮或沈云云、

一番ノ句ハ、靜三業、按筆勢二ノ句ハ忘、餘事習手三

ノ句ハ、朝夕ニ手跡ヲ觀ベ、四ノ句ハ、常ニ音信習へ、餘

又習へバ、退屈ス、

給フ、我朝之曆應四年迄ハ、既ニ九百十九年也、一日ト云字ニ、中ノ點ヲ打事、日輪ノ中ニ鳥ノアル事ヲ表スル也、其故ハ、光ハ必闇中ヨリ生ゼリ、然間法性ハ必無明ヨリ生ズ、爰以佛ハ、衆生界ヨリ生ジ、日輪ノ光ハ、衆生ノ業ヲ以増スル間、其衆生ノ業ヲ云ヘバ、極テ黒也、故ニ黒業ト名付也、如此黒業ノ中ヨリ、大患利生ノ故ニ、日光初テ顯レ給フ也、故日輪ノ中ノ黒鳥ヲ顯ス也、日ノ字ノ中ニ、二打ニハ點ヲツマケテ、一ニスル事此故也、一月ト云字ノ事、此字ノ中ニ點ヲ二打事ハ、桂ト兔ヲ顯也、桂ハ、閻浮提ノ影也、兔ハ、釋尊在世時野中ノ火ニ、兔燒死ケルヲ見テ、帝釋哀テ水珠所成ノ月輪之中ニ投入テ、命ヲ助給フ故也、真ニハ點ヲ二ツ打也、已上口傳畢、此書者極最上之抄也、雖、然存手跡奥深故傳畢、法一不、一、一、道一不、一時節、一、一、天老和尚作

法スナヒシヤウ一不ハ、是法平等、道サニ一不ハ、大無敵長明、
難ク一レ、達磨不義、依リ一レ、白雲深處金龍窟、

麒麟抄卷第八

口傳依物可レ
書字形事

一異國體狀利劍之姿可書之爲令異國調伏也、
一諷誦顯文、行少充點ヲ略而墨ヲ厚可書、是顯寂滅
相質也、

一申狀顯書卷數ヲバ、眞ニ點少ニ薄墨ニ不レ勻レ紙白可
書是ハ息災延命ノ行者以白爲本故也

一緣起等ヲバ行草ニ、何ニモ讀ヨキ様ニ可書也ト云云、
一講式ヲバ行草ニ打交テ、墨黑ニ、伽陀ヲバ眞行草ニ、
細高ニ可書也、和讃ハ行草ニ、柔輭ニ、チニハヲバ假
名ニ可書也、

一往來ヲバ、詞ヲバ連テ、墨字ヲバ一字充、候ト云字ヲ
バ、初ハ行ニ、中終リハ草ニ、書物之名ト、人ノ名ト、國
郡ノ名ト、上所ノ名ヲバ、眞行ヲ交テ可書也、
一廻文ヲバ、初ヲバ行、奥ヲバ草行ニ打交々々可書
也、

麒麟抄卷第七終

一御教書ノ請文ヲバ、行ニ圓ク可書、是ハ政道ノ義也、
一消息體ハ相稱々々、讀吉見吉様ニ薄墨ニ、春霞、霞タル
様ニ可書也、是遺所祈禱ノ義也、但貴人ノ御方ヘハ行
ニ墨黑ニ可書也、

一闕字事、太上法皇院宣給旨論言勅定聖斷、如此物ヲ
バ、字ヲ行ニ、筆ヲ染テ靜心可書也、
一宣旨ヲバ眞行ニ、每行上ヲバ太ク、下ヲ細ク、上臈敷
尋常ニ可書也、

一佛菩薩名號ノ事、眞行草者、旦那可レ依好書也、筆仕
點角ノ心馳ハ、上ノ如額少柔輭ニ可書也、
一幡銘事、堂社ノ幡ヲバ、柔輭ニ眞ニ書ク、軍陣ノヲバ
鋒崎ノ點ニ可書也、

一木札ヲバ墨黑ニ行ニ鮮カニ可書、眞ハ見所ナシ、
一大文字ヲバ上太ク平ニ、下ハ細ク直ニ、上ノ字ノ點
ヲバ遠ク打ベシ、少シ左ヘ曲ベシ又右ヘ可曲點ヲモ、
廢頭補點ニ打ベシ、遠打點ハ、如龍鬚點ノ移、字移、筆
使之様ハ、枯木ノ兩谷ニ打渡タル様可書、又ハ古藤ノ

兩岸ニハヒカ、リタル如ニ可書也、

一小字ノ筆使ハ、大文字ノ筆使ニ可書、大字ハ小字ノ
姿ニ、柔輭ニ書ヲ爲上品也云云、

一牛玉ヲバ、字姿モ、點ノスガタモ、鬼形ニ書諸天童部
ノ佛法護持シタル體ニ可書、印ト云字ヲバ如俱利伽
羅明王書也、

一堂宮之壁ニ物ヲ書事、設ヒ雖有旦那所望、一夏二夏
者頻ニ可致辭退也、餘有旦那所望者、能々按シ習テ
可書、點角ヲバ、垂露橫露、如意、人足、生曲、雲卷、鳥頭、
牛尾、蛇尾、蛇尾、鳥頭、星光、流波、流烈、春霞、懸乳、連珠、
朽木、折條、虎爪、如此之點共ヲ一々ニ得心可書也、絕
命中絶、合字、雲出、登火、懸針、傍生ノ點、橫扇等ヲ不可
書者也、一間ニ一充長ヲバ、七尺ノ間ニ四尺六尺ノ間

ニハ三尺五尺之間ニハ二尺五寸ニ、柔輭ニ可書也、其
所ノ守護ヲ初、其里村モ安穩成様、優成體ニ可書也、
一屏風障子ニ物ヲ書事、大略者是色紙ニヲナシ、色紙
形書ノ事ハ、四季ノ繪アラバ其繪ノ心ニ隨テ、四季ノ

心ヲ可書也春着青紙也雙調之色ニシテ春ノ季ヲ用ル心也字ノ姿ハ緩々ト高貴ニ書夏ハ赤紙ニ黃鐘調少シ字ヲ太ク緩々ト可書秋ハ白紙平調ニ字形ヲ落葉ノ姿ニ切々神妙成趣ヲ書冬ハ黒紙ニ盤涉調ヲ枯木ノ姿細堅ニ可書人顔鳥頭獸顔月日ノ中雲霞ノアラン繪ヲカキル事スベカラズ

一扇ニ物ヲ書事未折已前ニハ不可有書事折後間ニアテガヒテ間ノ中ニ初ヲバ二三間計置テ藤花様落花様ニ字ノ間ヲタバリ可書也

一團ニ物ヲ書事設ヒ雖有人所望無左右不可書之若又有書事者義之ガ書タル銘又道風之書タル銘朗詠如此物ヲ可書大骨ノ下ノ月ノ輪ニ不可書懸也

一燈爐之銘書事細高四方字ヲ不透少シ點ヲ略シテシ繞ノ殖處ヲバ燈火雲出上艶可書是ハ炎隨風ヒラメク時此點

一番帳書事内裏ノ廂ノ番帳ハ眞之行ニ書ク湯屋月

未敷ノ蓮花之姿ヲカク也

一文抄ノ銘ヲバ眞ニモ行ニモ書柔艷ニ見ユル様ニ可書也又眞行草ハ本主ノ所望ニヨル也

一鐘ノ銘書事何ニモ眞ニ可書少々ハ行ニモ書ドモ且那ノ名乗寺號年號又鑄師ノ名字ヲバ皆眞ニカクベシ又隸字ヲ可書響アル體也銘書事墨厚摺可經三時云

一白樂天之銘ヲ書事家々ノ書詩在之云

一八祖之銘書事一枚ヲバ眞ニ一枚ヲバ行ニ一枚ヲバ草ニ可書自餘ノ繪像モ是ニ准ズベシ

一人丸之銘書事ホノノト云歌ヲバ木ノ葉ノ浪ニ洩タル姿ニ可書散久カト云歌ヲバ梅ノ花ノ散タル様ニ打交テ字ヲバ少シチリトニ書ベシ

一歌之端ニ作ヲ書事字ノ勢ハ一寸計ニ書テ日付ヲバ少シ傍ニ可書也初春春夜ナド隨時書文字餘時ハ

二行ニ書之行草ニ柔艷ニ假名ノ筆使ニ可書也一將葉之馬ヲ書ニハ眞ニモ又行之眞ニモ書細高

並ノ番帳ヲバ字ヲ太ク煙ニ當共必ヨク見ル様ニ可書也十二月ノ番帳ハ月ト云字ヲ十二様ニ宿直ノ番帳ハ眞行草ニ打交々々可書也番ノ字以上同坊寺公阿闍梨法橋律師僧都等世流布ニハ行福々ト少シ高可書也別本ニ法事ノ番帳ハ行草ニ見能幽玄ニ可書也

一戸帳銘ヲバ眞ニモ行ノ眞ニモ文字ヲバ連テ不可書墨黒一字ヅ可書也眞本イカニモ筆ヲワケテ可書也

一池銘事鴨頭之點可書也鶯鴨下居テ遊ブ姿ニ准ジテ書也

一硯之蓋ノ上銘ヲ書事馬蹄長池蹄面龜首孟崇石幽池石含清石共可書垂露之點捨所ヲ鳥形飛鳥可書也鳥ノ池飛廻居姿准也調伏硯ヲバ謂孟池石形ハ三角也

一一切ノ銘ヲ書ニハ眞行ニ蛸斗飛鳥ノ筆使ニテ後ニ尋常ニ可書也一如法經之箇之銘ヲ書事字形モ點角モ開敷ノ蓮花

洩可書鮮々ト四角點短眞ニ緩々ト可書也金ヲ極草ニ可書也

一絹ト布トニ物ヲ書ニ別ノ布ヲシメシテ内ニ卷加テ置テ暫アリテ書ベシ

一石ニ物ヲ書事石之面ヲ濕リタル布ニテ巾ヒ墨ヲ厚ク可書也

一油紙之久成テ墨不付ニハ紙ヲ少濕テ巾可書又者綿ニ油ヲ少シメシ紙ノ上ヲ薄可巾サテカクベキナリ

一油紙ノ油ヲ取事油ヲ曳テ物ヲカケ聽而檀紙ヲ卷重而火ニ煖テ堅捺テ懷ニ入テ四五夜モ置ヌ又ハ風ノアタラス物ニ入テ十日計置ベシ

一檀紙打紙ニハ筆ヲ浮テ緩々ト取テ靜ニ可書打紙ニハ墨ヲ厚摺檀紙ニハ薄摺自餘者世ニ流布ノゴトシ

一薄紙ニ物書事綿ニテ上紙サツリテ可書又燈心ヲ以テサソリ可書又油ヲ取事夏ハ春草ヲ刈ヒロゲテ

其上ニ油紙ヲ置、草ヲ敷敷枚、如此一夜置テ可_レ見ナリ、
一神願ノ札書事行字ニ可_レ書、行ハ福ノ體也、彼所豐饒
ナラシメン爲也、垂露ノ點ニ可_レ書、除火難故也、

一宣命書事、行ニ可_レ書終リニ申ト云字ノ堅點ハ、長ク
曳テ可_レ書也、

一刊、木文字書事、劍形ニ點畫鮮々ト可_レ書、爲_レ易雋刊
也、上ニ云所ノ額ノ文、佛菩薩ノ名號ヨリ是マデ、皆墨
ヲ背ニ厚摺テ、經一夜可_レ書、筆ニ墨ヲ染テ後、又流メ
可_レ書也、

一繪具ノ上ニ物書ニハ、耳ノ垢、顔ノ垢指ニテオシ巾
テ可_レ書、猶不付バ耳ノ垢ヲ墨ニ摺合テ可_レ書也、

一手本可_レ寫事、或ハ自奥端へ寫ス節有之、文字不亂
故也、或ハ筆ヲ染メ、大ナル字ノ所、或ハ墨ノ厚所ヲ先
ウツス、墨乾ク所ヲ取返シテ後ニ寫ス、墨付見ヨキ也、
筆ヲ點シ端ヨリ奥へ寫セバ、墨ツキ不見シテ文字ノ
トクナリ、黒クシテ惡シ、雙紙ノ手本ハ、自始奥へ可_レ
寫、又油紙ニハ墨乾ク筆ヲハメキ、文字帶解キ廣ゲニ

テ惡也、然レバ筆ヲ堅ニ取テ、如上厚キ所墨ノ乾所ヲ
見分テ可_レ寫、殖ル點長ク堅ニ點ジ、文字ヲ連テ字ヲ浮
テ可_レ書也、筆勢ニ不_レ書得所ハ可_レ書切、サテ跡ヲトメ
テ可_レ書也、墨色同ク見テ吉也、打立遣廻可_レ任、手本、サ
リナガラ、キハ利ニ見ユル様ニ可_レ寫、初心ノ人ノ爲ニ
ハ、手本ノ折目疊目、本ヨリ鮮々ト可_レ寫、打立ハ筆サキ
圓カニ可_レ打立、筆腹ニテ打立、若ク見ユテアジ、寫ス
時ハ本ヨリ少シ細ク強ク可_レ寫、初心ノ人ノ手本寫ス
時ハ、フトク任筆可_レ寫也、

麒麟抄卷第八終

麒麟抄卷第九

書狀體用意事

先紙ハ皆板目ノ方ヲ裏トスル也、但杉原ハ板目面也、
一重ヲ取、兩方ノ端ヲ合テ見ニ、長方ヲ端トスベシ、置
事様手計、或者三分際ハ、笏ヲ一置程ナド云共、端へヨリ
タルハ見苦、餘ニ深モ置ザル也、書様ハ紙ノ上下へ指
詰テモ書、或ハ廣殘テ裏ニナレバ、次第ニカタサガリ
ニモ書也、卷時ハ、狀ノ奥ヲ行半計打返テ可_レ卷、深ク
折ハ尾籠也、サレバ、極信ノ人ハ、折不返シテ、麩而卷也、
立文之時ハ、此上ニ禮紙トテ一紙ヲ卷テ、上所_レ讀上、進上、
カクアルベキヲ、内封ニハセザル也、上所ナクバ、麩而
禮紙モナシ、禮紙ヲシテ紙禮上ヲ封ハ、是ヲ内封トハ
云也、一重ノ面ノ紙ノ端ヲ、中ヨリ上テ切テ、順ニ卷テ
封ズル也、當世近衛殿ノ様ト云テ、逆ニ卷テ封ズル事
モアリ、幾度モ狀ノ面ノ左ノ角ニ封ズベシ、曳出シ々々

封狀モ封ズル事ハ、サセザル也、タゞ一度ニ可_レ封也、其
封目ニ墨ヲ曳モ、不長チト曲テ曳ベシ、例へバ、
是程ニ可_レ曳、若遠所へ遣バ、封ノ字ヲモ可_レ書、只細ク
ニモ封ノ字ヲ書人モ有、其書様ハ、対此姿也、眞行等
ニハ不_レ書也、立文之時ハ、一紙ヲ堅様ニ、紙ヲ短殘而卷
テ、立文上ヲ押而又上テ、中ノ狀ノ面ノ立文ノ面ニ合
様ニ見合テ可_レ卷、構テ口ノ明ヌ様ニ立文スベシ、上下
ノ捺タルハ、シノクチヲ、圓ク三分可見、上所ヲ書ニ
ハ、捺メノ際ニ指寄テ、中字粗謹上共、進上共可_レ書、人
名程者一字ヨリモ、ナト廣シテ可_レ書、我名ニツ、クル
モ不_レ首、我名乗ヲ書テ後ニ、上之人名等ヲ、書人モ有
也、内々ノ文ノ腰文ヲモ、卷上ヲバチトオシテ、面ニ平
スベシ、去バトテ餘ニ折目見ユル程ニハスベカラズ、
立文ノ捺目ヲ紙捻ニテ遠キ所へ遣ス文ヲ結也、水引
ノ紙捻ニテ不可_レ結、又紙ハ昔ハ禮紙計ヲ少シ劣タル
ヲ用ケル也、其故ハ上ヨリ是ニテ御返事ヲ被下故ニ、
我ヲ卑下シテ、少劣タル紙ニテ上申也、今程ハ同紙ニ

テ用ユル也、別紙長短ヲ下ノ端ノ禮紙ヲ合様ニ卷
 ハ、下輩ノ方ヘナリ、等輩ニハ中程ニ卷、上ハ端ニ合様
 ニ卷ベシ、同紙ハ無儀、上卷ハ捺目ノ餘、敬者上ヲ短、等
 輩ニハ吉程、下輩ニハ上下同程也、卷様餘ニ廣、太成ハ
 尾籠也、餘セバキモ下賤也、判形高モ尾籠、餘ニ大成モ
 尾籠也、文ノ末上ハ一折、中ハ三折、下ハ四五折、兒女房
 同之也紙捺切事、菅家ニハ上ヘ二刀、下ヘ一刀、紙白面ヲ
 仕時也小野
 紙也、江家ハ上ヘ一刀、下ヘ二刀、紙付ノ時大江伊兼之流
 也、次兒女房ノ文ハ、奥ヲ四五折深折返ス、若立文ナリ
 共、禮紙スベカラズ、内封スベキ也、墨之引様是ハ細ツ
 メニ引也、**譬**此體ニスベキ也、立文ニハ一重ヲ以立
 文也、女房文ニハ、立文ノ紙ヲ長スルトイヘドモ、當時
 必左モセザリ、捺目ニハ、**凡**此程ニ上ヨリ下ヘ長引也、
 捺目ノ上ハ下ヨリ長カルベシ、名乗ヲバ一字ヲ假名
 ニ可書、次同字ヲ行ノハジメオハリニ置テ、二折ノ字
 ノ同様ニハ不書也、又人之名ヲ從中切テ、上下ニ不
 可書、但有口傳又女之始者横手ニフセノベテ、殘ノ

上ノ字計、下ハ可置ニ字程上卷ハ紙ヲ折卷ベシ、
 一御所様之文書様、裏書御判ノ在ハ、ツ一ナリ、
 一狀之中ノ文言之事、大都宛構テウラノト可書、私
 詞ナト作墨字不可書、候之字ニハ、ノ字ナドサノミ不
 可仕、人ニヨリテ敬ニハ、恐畏謹參入、言上ナドノ詞
 可書、等輩之人ニモ、其妻ニ同様ニ可書、**譬**光臨
 光儀、入御、御渡ナドハ少敬也、來臨ナドハ少平懷ナリ、
 次之字並事詞隨所依ベシ、多分之字ヲ使ハ、之後、之
 條、之由之旨之上、之處之間、之趣之至、之次之時、之
 外、之儀等ハ、詞下ニテ置時ハ、皆之ノ字ヲ可置、但其
 外、其間、其時、其儀、彼趣、其旨、此程、此上、此趣、此時、彼
 由、彼儀、彼趣、彼次、彼時、此由ナドノ詞ニハ、之ノ字ヲ
 不可置、又ナンノトノ相論之間事ナンノトノ由
 之事、ナド之様ニ事ノ大都ヲ、之時、之由之間等ハ、之
 ノ字ハ不可置、但隨事依詞用也、否ハ、ノガタシ、能
 ヲ可心得、又之ノ字ヲ行之一番ノ字ニハ、多分消息者
 不書也、次惡時等ノ字ハ、多引返テ書ニ書也、左モナケ

レドモ、細々ノ捺文等ナドニハ書也、遠所ノ返事ニ不
 可書也、一用狀之裏事、引返書ニハ、先初ニハ普通書
 札ヲ書之、其後ニ返事ノ趣ヲ可書、卷時人ノ書タル
 名字等上ニ見ニハ、内ヘ折入テ封是細々ノ儀也、
 一勘付狀事、勘ニハ、何事ニテモ返事ノシツベキ所、墨
 ヲ曳テ、其ツバニ返事ノ所存ヲバ可書、墨ノ曳様ハ、**譬**
 バ行ノ字ノ上**フ**此様ニ曳ベシ、就其者アナタヨリ此
 方ノ事ヲ敬テ、御字ヲ置テ書タル詞ニハ、御ノ字ノ下
 ノ詞ヨリ墨ヲ可曳、アナタノ詞ニ我事ヲ書テ、御字ヲ
 略シ、子息ノ事ヲ書トテ、愚息ナド勘ベシ、此事サノミ
 書ニ難載、可心得也、カ様ニ勘テ、等輩ノ禮ナラバ、恐
 恐謹言ト書タラン上ニ、又墨ヲ可曳、月日ノ上ニ墨
 ヲ可曳、實名ハアナタノ實名ヨリモ、左ニ可書、又返
 事ノ詞ダテ、アナタノ月日等ヨリ、尙奥ニ入マテ書ナ
 ラバ、書終ノ後ニ、禮ヲ書實名ヲ可書、サテ初書ニ、勘
 申事ノ恐入候、無深程ニカ様ニ勘付之由申ト可書、是
 ハ細々儀ナリ、

一端書事、狀之端ニ尙ト云、殘シタル事ナラバ書
 也、中程ヨリアゲテ書テ、文ノ初ノ行ノ際迄書スレバ、
 又今書ツル上ノアキタル所ニゾト心得テ、歌ヲ書様
 ニ散書ニカクベシ、其後者行ノアヒノニ書ベシ、三
 賢等之消息者、端書ヲ上ヘ上テハ不書、懸而行ノ間々
 ノ、牢ヨリモチト高程ニ交テ書也、當世ニハ不然、
 一追書事、禮紙ニ逐申、追言上等書テ、又禮者如左、次
 ノ行ニ一字計下テ可書、鎌倉様トテ、書ハテヌレバ重
 而恐々謹言ナド書、是ハ田舎様ノ事ナレドモ、但隨所
 用否有ベシ、
 一公家ヘ折紙ナド書進時者、杉原不可叶、引合ニ可
 書也、公家ヨリハ、曳合ヨリ外ハ御狀アソバサレズ、武
 家ヨリハ、公家ヘ引合ニ書テ狀ヲ進上スベカラズ、杉
 原ニテ可書也、折紙ヲバ曳合ニテ公家ヘハ可進、
 一曳合ヲ折様、末ノ端ヲ内ヘ折テ、始ノ端ヲ上ニ三ニ
 可折、折紙ヲバ先折テ可書也、折目文字之アタラヌヤ
 ウニ可書也、只杉原ヲバ中折ニシテ、又二重ニ可折

サテ四季ニ成也。

一函認様事、函之中ニ敷紙トテ、箱之尻程紙ヲ可入、狀ヲバ禮紙計シテ函ニ入テ、箱ノ表ノ正中ニ紙ヲ卷留、粘ヲ餘ニ付者、隅々ニ可付、上下認様ハ、先箱之尻ノ方ノ紙ヲ中へ押入テ、後ニ兩方ノ紙ヲ、又中へ押入テ、箱之表ノ透ノ紙ヲ上ニ押懸テ、續飯ニテ可付、但上下ノ口ノ正中ヲ、刀ニテチト横ニ切テ、上ヨリ覆紙ノ崎ノ三角成ヲ入ナリ、其上ニ封ノ字ヲ上下ニ書ベシ、タトヘバ口ハ封此體也、面ノ様ハ得下下此様可成、函ニハ文ヲ入テ後、三所計紙ヲ細切テ、卷テ後ニ紙ヲ以可誘也、次ニ僧徒ハ僧正也、其、某僧正等可書、次關字ハ、勅勅辰天院宣詔、此等ハ關字ハスベシ、又平出トテ、君之御名ヲバ、次ノ行ニ可書、次細々ノ狀ニ、家主師匠等ナドヘノ禮ヲモ不書シテ、可進申入候ナド計書テ留也、又捺目ナドニ墨ヲ引テ、サテアル事モアリ、是又禮ノ書ニクキ時モスルナリ、次女房文ノ禮ノ事、若官女ニテアラバ、親ハ何レノ家ナリ共、彼主ノ禮ニ可書

人之妻ナラバ、縦華族ノ娘、地下之ヤカラ成共、彼夫ノ又禮ニ可書也。

麒麟抄卷第九終

麒麟抄卷第十

一諷誦文様

敬白

請諷誦事

三寶衆僧御布施一裏

右奉爲過去聖靈出離生死往生淨土證大菩提所請誦如斯敬白

年號月日

諷誦文者無禮紙爲具諷誦文紙物、誦經云、諷誦文不具時、裏物之紙ヲバ、横ニハ三枚、長ハ四枚可續之、總十二枚ガ吉也、長様ハ、側續也、横ニハ頭可續、本體續タル紙切、大帶ニハ一枚ヲ長様ニ切、スルガ吉程也、小帶ニツ入也、其毛横ニスル也、續紙二枚、諷誦文二枚、總十七枚也。

一大般若經目錄事

御祈所

奉轉讀大般若經壹部六百軸

色々可有之

右自其月其日迄于今月其日、轉讀上如件、經王奉祈

大施主息、延命恆受快樂之由狀如件

年號月日

某位所如前謂

一碑文書様

保元二年歲次依兩院御合戰、右衛門督信賴卿於此處卒去、骸屍溢路頭于時、無緣上人某行、如法經、奉

納也、見之往來輩可唱念佛名而已

年號月日

聖 某

一諸定書様

屈請御讀經衆事

法橋々々已講々々

得業々々圓堂々々

右來何日召條、內裏季御讀經也、仍任例所、屈請如件

年號月日

又様

僧綱某大法師

右依宣旨奉請自來廿日被始行最勝講講師之狀如件

年號月日

從威儀師 某某

一禁制狀書様

禁制當山木事

右近來傍郡傍庄之諸人不觸于山守多切盡於材木之條無其謂事也若自今以後於切盡輩者任法取剥衣而可禁遏之狀如件

年號月日

一點定其名當作田事

右去年官物米之代點定如件

年號月日

一闕遺札書様

闕遺ト云二字計ヲ札ニ書テ馬牛ノ頭ニ付可放也不然者可有罪科也

一舞議書様

注進常樂會舞帳次第事

破陳樂右春鶯囀耳例

蘇志摩萬歲樂々々

右注進如斯

年號月日

八人樂人自下萬位所某次第書達也

一賣券書様

賣渡進田地事

合一町者

四至限東限西限北限南

右件田島者某先祖相傳之私領也而依有要用限直馬何疋相副本公廩永所賣渡其人實也仍爲後日沙汰券文之狀如件

年號月日

某之判

一讓渡田地并山島之事

合田何町何反者

在所其國其郡其村內四至限東限西限北限南

右件田島并山屋敷者某先祖相傳之私領也而子息并養子某猶子某永所讓之實也努力不可有他證者也仍爲後日讓狀如件

年號月日

某之判

一借狀書様

申請御出舉之事

合何石者

右件稻米以來秋時加五把之利必可辨濟之狀如件

年號月日

某之判

一目安申狀書様

目安何家某其自是書

右目安粗言粗言目安粗言トモ上如件

年號月日

申狀者目安二字ナシ自餘如目安目安者末假名ヲ以可點申狀ハ不可點目安ト申狀之行ヲ調不可書半可書也年號日付此行之内也心者調々成時者敵人我ニ對故也半者我ニ番者ナキ心也不可有候字

夕ノ心得ベキ物也

一過書之様

上進之御馬何疋何十人此内御員開渡事無煩可勘過之由依仰下知如件或有勘過者

年號月日

國中諸開中或其在所

一繪旨書様

被繪言儀云々

年號月日

謹上 某殿

一御教書ノ様

前者普通之消息也留處何々之由所被仰下也仍執達如件

年號月日

一消息書詞様ハ爲悅々々爲悅不少候皆下人之恐悅候相半候等輩之人之許合畏申候尤以恐畏候上萬之本執達下人之許上啓言上奉之敬言獻之敬言進之聲謹

云々仍執達如件
位 官 實 名

以令進上候、跪以令進上候也、已上敬、每事期、面拜候、期、
 而謁諸事在拜謁仔細期後拜、他事在後顔已上、每事
 期見參之次候、他事又々可申承候、仔細可令參啓
 候、已上、追可言上候、仔細參上可言上候也、恐々謹言、
 等、恐惶頓首謹言、敬言、某頓首恐惶謹言、許へ、上所者、
 謹上、等、謹上、已上、進上、敬言、名所之下狀書也、主敬ニ者書
 上所不言、只我位書實名之下狀ト書也、消息ハ雖一
 紙必可用禮紙也、又面書畢、日付裏ニ返莫書、一一面
 書タラバ縮テ日付ヲ可書、又裏へ返シ書程ナラバ三
 四行モ書也、只一行ニ書テ日付ヲ書事見苦也、此等ハ
 能書之故實也、又立文ハ紙何枚ニモカキタレ、一紙卷
 ニスベシ、重而卷事不可有之、

一闕字附出字、
 皇太子 中宮 朝廷 闕廷 春宮 關白 天下
 陵芳 乘輿 車駕 詔書 勅旨 明詔 聖化
 勅書 院宣 敕慮 天恩 慈旨 天裁 朝恩
 朝家 鴻恩 處分 望請 大社 以上闕字

平出之字闕行ニ書也、
 皇祖 皇考 光帝 天子 天皇 皇帝 陛下
 至尊 大皇 天皇祖以上
 今按、平出者別行書也、若先行ヲ下ノ際迄有書實事者、
 次行成共二三字ノ程ヲ闕字シテ可書也、又太上天皇
 ノ御書成者、帝王者不平出、帝皇御書成者、太上天皇者
 平出可書也、是則俗文之儀也、

或流云、小刀ヲバ臥置也、筆ヲバ笠ヲ指、墨ヲバ取柄ヲ
 可指、織細カフガヒ、笏、
 具平親王 料紙者左
 之御孫左 二置也
 大臣後摩 具平親王
 筆之流 後京極殿
 日野殿御 法勝寺殿
 息孫綱御 御事也
 子右馬殿 妙製石名
 忠雄之流 具平親王
 動修寺柱 具平親王
 大納言光 具平親王
 額之流 具平親王

置



麒麟抄附録一

麒麟抄卷第十終

麒麟抄附録一

一假名之筆仕トハ、筆軸頭ヲ拳テ堅ニ立テ、筆崎ヲ不
 折シテ、紙上ヲ如巾緩々ト結下ス、男ハ節高ニ書、女
 ハ節下ニ可書也、
 一手本之書用様之事
 當世古様雖多風情、成手本ト不成手本アリ、不成
 手本ヲ習テハ、雖送數日不舉也、問云何様ナル手本
 不成手本候哉、答曰、任能書之筆勢書、マダ筆之緩々
 トシタルヲ習故ニ不舉也、手本ニ成手本ハ、何様候哉、
 答曰、筆太ニ平生ニ書タルカ、筆ノ捨處、點角ノ座席定
 之無屈曲ヲ習ガ能也、問云、古様之手有德失、否、答曰、
 有德失、其德トハ、一點ニ有數之筆仕、仍習之故ニ得
 筆之力は、德トイフ、失トハ、初心ノ時ハ、先數ノ筆仕
 ヲ似セン、トスル間、心退屈シテ手損、是ヲ失トイ
 フ、問云、當世之手習有德失哉、答曰、有德失、其德トハ、

當世之大ナル姿ニ延々ト筆仕滿タリ、然問習^ハ之筆ノ
 油出來シテ、早手本ニ近付故ニ德ト云失トハ、後手弱
 シテ不上、故ニ失トイフ、問云、加様之事ヲ何様ニ心得
 可習乎、答云、古様ヲ習時ハ、當世之筆仕之様ニ滿々ト
 習ヘ、是ヲ爲助筆也、當世之手ヲ習時ハ、常ニ三賢之
 筆仕ヲ可習也、如此習ヘバ、當世ニハ字之神出來、古
 様ニハ福々ト強ク成ベシ、

一問云、一ニハ習、二ニハ寫、三ニハ見ト申候有德失
 哉、答曰、一ニハ習ニ有德失其德トハ、先初心之時、一
 寸之手本ノ字ヲ二寸ニ習故ニ、筆之勢出來ヲ德ト云
 失トハ、每點角心地有所ヲ不知シテ習故ニ、遅ク上ヲ
 失ト云也、二ニハ寫ニ有德失其德トハ、手本近付故
 筆仕ヲ見覺ヲ云德、失トハ、餘ニ手本ヲ寫セバ、筆ツマ
 ヘテ不上、三ニ見ニ有德失其德トハ、無師而自然見
 間、心地ヲ見定テ書間、德ト云失トハ、日數ヲ送ニモ思
 様ニハ不上也、是ヲ失トイフ、
 一手本之文字打立、捨處ヲ當方可習事

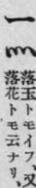
問云、筆之打立捨所、點角之座席ヲ定平、答曰、先初心
 之爲ニハ、四方八方ニ仕、打立之點之趣、何方ニ當
 ルト、手本ヲ見習、捨處之下ノ方何程之間ニト見定テ
 可習也、問云、八方之點之事可有字、口傳アリ、
 一橫豎之折目之事、如何可得、意哉、答曰、初心之時ハ、
 豎之折目ヲ橫ニ折故ニ文字悴テ見苦、豎之折目ハ豎
 之點ヲ如引、筆ヲカカロト、如蛇行可書、是ハ筆之
 神角之折目之有時、橫之筆仕ヲ以テ角ニ當、是ハ骨之
 姿ナリ、此ヲ字之神ト申也、

一點角之筆ヲ納捨處、何體可納捨哉、答曰、真草行ニ
 付テ數ノ様アリ、真トハ木ヲ切儻テ如植捨點モ利姿
 ヲ爲、真筆仕ハ捨處植所モ急也、
 一筆ヲ細ク書人ニハ、筆ノ真毛太立可令習也、
 一繪ノゴトク書人ニハ、墨ヲ厚摺テ可令習也、
 一手習雙紙之事、吉紙ヲ續テ可令習、習タル上ニマ
 タ習ヘバ、手不上也、書次テ散々可書也、
 一墨摺筆以墨水ヲ搔上レバ、墨ノ口朽テ惡シ、硯面ニ

水少入テ摺墨ノ朽時ハ搔上タル水ヲ以テ可摺、若イ
 ロ惡時ハ、石ノ面ヲ新シテ可摺也、
 一硯之相形之事、大硯ノ水入所深シテ、摺所高ヲ可用
 ナリ、

一於二字可萬事使^事

是ニ有^ハ點能々可得意也、

天大明源沙二之林三一ニ之  落玉トモイフ、又
 落花トモ云ナリ、

一於草字以一點可渡萬字事

一落花  橫魚鱗  中折點  同上

一依點之座席可有風情之事

橫點數、重下、橫之一點ヲ平聲字ノ中、豎ノ點ヲ直
 ニ、篇作ヲバ少胸ヲ削、廣ヲ中ノ點ノ小ヲバ立淵ニ、多
 時ハ平、一ノ點ヲバ自字長可書出頭ニ書時ハ、中豎
 之點之點ニ可書也、走ヲバ少胸ヲ削、右ヘ向時、天文字
 ヲ篇ニ書時ハ、去聲、上調トキハ平聲、

一以同點依字之風情書事、門之點圓之字之時ハ、少
 胸ヲ削時ハ、有愛、閉之字之時ハ、少高不曲豎ニ可書
 國之字之時ハ、四方豎ニ可書、小圓點之時ハ、圓ハ豎ニ
 目ハ少胸ヲ削諸字以是可得意、又大ナル圓之點
 之時ハ、雀爪ニ返ス、圓之小キ點之時ハ、針之尻ヲ返ス、
 大成圓之點之行草之時ハ、虎爪龍爪ニ返ス、字頭ニ有
 十文字、書有兩義、
 一點對橫豎之點之事、王ト云字、上之橫之點ヲ去聲、
 上中ヲバ少シ上、下ヲバ平聲ニ書豎之點之事、此字ヲ
 始豎之一點ヲバ左ヘ調、次之點ヲバ右ヘ調、次ノ點ヲ
 少シ右ヘ調、次ノ點ヲバ少シ右ヘ調、橫豎之點多時ハ、
 如此對シテ可書諸字以之可得意也、

一草之字一點ニテ可渡萬字之事
 字之中ニ有十文字之時、草ニ書コト、中ニ有時ハ、橫
 之點ヲバ連ニ十文字ニ可書、又橫之點成字、口傳云
 日曰田力如此等字アリ、中時橫之點等有時ハ、一點
 ヲ略ス、上點下ノ頭義可書、橫之點三點ヲ不可有連事、

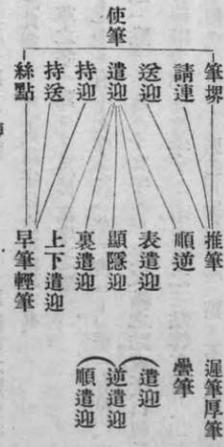
但字延テ有時ハ、上横之二點行ニ、下ノ其字ヲ草ニ可書太體

一略筆之事、木篇才篇等不可頭結折捨可書一字之中之點ヲ略スル事、高不結卷、消息等ニハ最ヨキナリ、一點對向筆仕、名目之事

- 折捨 緩下 廻推 緩上
- 推結 推捨 迎筆 推重
- 折捨 左右迎 廻縮 春筆
- 胸削 虎爪 蛭角 蛇尾
- 水登 廻結 補點 中折
- 雷走

一手本之字ヲ習テ後、人見スベキ事、真之物ヲバ千字習ヘ一字十二通也、行之物萬字習ヘ一字二十字通也、草之物三萬字習、一字百字通也、如此習後、文字書テ人ニ可見、其中ニ可有口傳

一或書曰、護命僧正イロハニ、ヘトナリヌルヲカヨタレソツネメミシエヒ、ナラムヲキノオタ、弘法大師ヤマケケフコエテアサキニモセス



翰十病

一使筆之事、筆擧トハ、上之點ト次之點トヲ書連テ、少推上下、上而モ下ニテモ、片方ニ筆擧之見ユル様ニ書

一顯隱遣點トハ、顯ハ結處結目之見ヲ顯ト云、隱トハ結目ノ不見ヲ隱トイフナリ、

一裏之遣點トハ、右ノカタヘ遣ヲイフナリ、

一上筆トハ、正點結目、上ニテ不結上筆ト云、下筆トハ、正點之下ニテ不結下筆ト云也、

一十病ヲ去筆事、半穴トハ一字ノ半穴也、是ハ字ノ穴ヲバ書ツブス也、草ニ付テ遣迎之筆仕ニ書、薄筆トハ記ニ不及也、

一長者心トハ、筆ニ物ヲ不思、緩々任筆可書也、

一筆ヲ點ニ當ヨトハ、折目肩等之打立處、點ノ腰是等ニハ可有肉、少可推也、

一絲點トハ、打立處ニ懸目、目捨處ニ不懸目、次ノ打立處ニ、マタ懸目、自然ト絲點ト成也、

一分限トハ、文字ノ不具ニナキヲイフナリ、

一筆數仕者、強筆ヲ筆テ緩々ト書、廻所モ強ツメテ可書也、

一關點トハ、筆ノ腰ヲ不折也、

顯セヨ、筆際ハ上之點ト下之點トヲ連處ノ、中點ノ際ノ見様ニ書顯セヨ、筆仕ハ流烈ノ體ニ書之、

一請連トハ、上ノ點ト下ノ點ト連處ノ中ニ、上下ニ當次ノ點ヲ、少推連ルヲイフナリ、

一送迎トハ、送處ニ筆ノ神ヲ書心持スルヲ云、心持トハ右之方ノ上ヘ、插點ヲ少雲出ニ左ノ方ヘ插ルヲ、圓ト可書也、

一遣迎トハ鳥頭也、

一持迎トハ、正點ヲ止處ヲ正留、次點ニ書迎ヲイフナリ、

△正點之勢、次點ニ勢ヲ少見ユルヲイフナリ、

△正點之止處之勢、次點本末平等ナルヲ云也、

一推筆トハ、上之點ノ連處ヲ、下ノ點ニ引推ヲ云也、

一厚筆者、書著ヲイフナリ、

一疊筆トハ、筆之疊處ヲ云也、

一順逆遣迎トハ、左右ヘ遣ヲイフナリ、

一表之遣點トハ、左之方ヘ遣ヲ云也、

一顯隱遣點トハ、顯ハ結處結目之見ヲ顯ト云、隱トハ結目ノ不見ヲ隱トイフナリ、

一裏之遣點トハ、右ノカタヘ遣ヲイフナリ、

一上筆トハ、正點結目、上ニテ不結上筆ト云、下筆トハ、正點之下ニテ不結下筆ト云也、

一十病ヲ去筆事、半穴トハ一字ノ半穴也、是ハ字ノ穴ヲバ書ツブス也、草ニ付テ遣迎之筆仕ニ書、薄筆トハ記ニ不及也、

一長者心トハ、筆ニ物ヲ不思、緩々任筆可書也、

一筆ヲ點ニ當ヨトハ、折目肩等之打立處、點ノ腰是等ニハ可有肉、少可推也、

一絲點トハ、打立處ニ懸目、目捨處ニ不懸目、次ノ打立處ニ、マタ懸目、自然ト絲點ト成也、

一分限トハ、文字ノ不具ニナキヲイフナリ、

一筆數仕者、強筆ヲ筆テ緩々ト書、廻所モ強ツメテ可書也、

一關點トハ、筆ノ腰ヲ不折也、

一蛇行トハ、捨所植處思様ニ緩々ト可捨、ノ點ヲ
バ蛇之走體ニ書コレハ真ニ付草ニハ龍鬚體ニ書書
トキハ筆之腰ヲ折書連也、

一下兼トハ、頭太、兩平ニ下之字之點ニ書著、上篇之勢
ヨリ、下之字之點ヲ長不書、喩軒ハ廣下壁ハ軒ノ内
是等ヲ以得意可書也、

一勢細ト者、文字ノ太平ニテ點之腰ヲキリノト書
任筆可書捨也、

一遣迎トハ、點之初ヨリ捨廢、無非遣迎筆仕也、
△遣迎トハ、遣所ハ輕筆ニ任ス、迎所ハ急ニ推可書也、

麒麟抄名外題事 大宮亮正四位下其經撰
問云、譬喩様字義顯乎、答曰、譬喩之義也、就之有五義
一、早義、二、拔義、三、細義、四、病喩之義、五、物ニ不點之義

也、初早義トハ、彈指之間十里ヲ翅、又山岩ヲモ通水
ヲモ通、角輪法之德ヲ具足ス、二、拔之義トハ、長シタル
義也、長トハ一切之物ニ拔タル要也、三、細義トハ、麒麟
ハ仁之獸也、餘獸ヨリ心微細ナリ、四、病喩トハ、昔大國

ニ、吞江南水人皆死ス、于時帝召天文博士占セラル、
博士ノイハク、水上ニ有毒草、其汁流而多人ヲ損ト、麒
麟ノ角ヲ削テ入ベシト申、其時削テ入ル、水ヲ吞人皆
無害、死セル者ニ掛レバ活ト云々、五物ニ不點義トハ、
清論之義也、餘物ニ不被取用儀ナリ、

一抄トハ私義也、聖人ノ釋ヲバ經ト云、菩薩之作ヲバ
論ト云、賢人之作ヲバ抄ト云、卷ト者、昔破竹其上ニ物
ヲ書然後卷、然問卷ト云、卷トハ箇ノ義也、

一起入文者、文選註表曰、文有五義、一曰天文、天文
者日月星辰也、言人視日月星辰、而後知晝夜四方之
趣、故曰天文也、二曰人文、人文者典籍記傳也、言人學

典籍記傳、而後知君臣父子之道、故云人文也、三曰物
象、物象文者、五色青黃赤白黑也、言會集衆絲、以成
錦繡、譬如集衆字、以成文章、故言物象文也、四曰音

聲、音聲文者、五聲宮商角徵羽也、言和合五聲、以音
聲譬如採合四聲、以成文章、故曰音聲文、五曰文字
文、文字文者、六本六體也、言夫作字之法有六本六體、

六本者、一曰指事、指事者、指其事以可知、猶上下是
也、言上字者點置於上、故云上也、下字者點置於下、故

云下也、二曰象形、象形者、謂象其形以可知、猶日月
是也、日無盛衰而常圓、故畫字其圓、月者有盛衰、以或
闕、故畫字其闕之、三曰形聲、形聲者、謂依形聲以相成、

猶江河是也、四曰會意、會意者、謂其意以可知、猶武信
是也、言止戈爲武、人言爲信也、五曰轉註、轉註者、謂猶
老考是也、六曰假借、假借者、謂猶令長是也、六體者、一

曰古文、古文者、今之尚書古文也、二曰奇字、奇字者、今
古文之中異奇之字也、三曰篆書、篆書者、今卯字也、周宣
王之史籀所造之字也、四曰繆書、繆書者、亦卯書之屬也、

五曰蟲書、蟲書者、今之鳥書也、六曰隸書、隸書者、今之
文字也、言秦時政事多而史不足記、於是筆絕、於諸隸
以爲政、故云隸書、諸字不離六本六體、故云文字トイ

フナリ、文トハ人ヲ兼タルヲ文トハイフ、人ハ天地ナ
リ、ノハ天、ハ地也、ノハ陰ナリ、ハ陽ナリ、陽
ハ金剛界、陰ハ胎藏界、定惠之二法和合シテ理智ナル

所ヲ文トイフ、一切衆生、思量分別スル所ノ理智ヨリ起
ケル故ニ、顯ナルヲ文トイフ、然問文トハ、衆生ノ心智

體也、珠トハ色法理體也、師トハ能化也、法ニシテ非法、
所ノ法ヲ云、故ニ名能化也、利トハ思量分別スル所ノ
各別也、菩薩トハ慈悲ナリ、天地之中、初マル物ハ字也、

字トハアザナナリ、魚網トハ紙也、昔網之朽タルヲ海
ノハタニ引散ス、紙ノ如クナリ、夫ヲ取テ物ヲカク、自
爾以來、魚網ト云也、威靈神トハ、文字ハ非情有情之種

子ニシテ、本有ノ妙理也、故諸神納受ヲタレ給タリ、
一、槐林トハ、植槐木於其本、唐ニハ學問ス、彼槐木ニ所
觸風、當皆利根也、然問槐林ト云、

一、拾古言考、行成之子、行經卿、長和四年幼少之時集
古人之詞、肝要、未曾有本也、

一、筆法事問云、何ヲ以テ可指筆法哉、答曰、手書之詞、
又ハ大師之筆法集、此等ハ皆筆法也、問云、是等ハ物書
之要處又緣起等也、是モ不宜也、何可謂筆法哉、答曰、
法トハ定義之上ニ所謂抄等ニ定處ヲ云也、問云、然而

手書之上ノ故實之定法ヲ習處ヲ可謂筆法哉、口傳云筆法トハ自一卷至數卷書置乎、一筆前トハ筆指顯心性也、一切之物ヲ書ニ、不移境界之意可書、不然者後見ニ必有輕物ヲ書ニ先靜心手本之面影ヲ可思思之中也ト云心ヲ不動、古人云急流石中、千波萬波打不動心、以如此之意可書也、一崑松トハ漢之高祖之廟也、崑マト讀也、一山王トハ衆生一心之所ヲ三ト云、一ニハ即心、即心即一也、然間爲圓宗之法護、山王可謂、山王之御託宣云、雖是一體而意三名、雖有三名而無三體、文一王ト云讀アリ、文句玄義豎以一貫三名四王ト云、一手習ニ有二、一ニハ大手、二ニハ小手、大手トハ、手本字ノ大ナランヲ拾集テ、タブノト可書、小手トハ、筆コマヤカナル姿ヲ可學也、一手習ニ有二、一ニハ眞ノ筆ヲナラヘ、二ニハ寫ノ筆ヲナラヘトハ、手本ハ雖寫筆勢心地ヲ口傳シテ習ヘ、寫手ナラヘトハ、任文字習ヲ云也、

一問云點ハ何之故ニ點トイフヤ、答曰點者本有之字情ヲ點ト云也、阿字トハ動靜ノ二ヲ云タリ、非五色非方圓、非有非無、但法爾ナル所ヲ佛トイフナリ、佛トハ慈悲也、慈悲トハ圓滿也、圓滿トハ寶珠也、寶珠トハ大日經之說曰、下面點圓ハ、丸字也、境ナル處ヲ凡夫トイフ、思量分別ナル處ヲ輪廻スルトハ云也、寶珠ノ點ヲ可用假令如此可書也、

麒麟抄附錄一終

麒麟抄附錄二

鳥羽玉靈抄集

權大納言行成卿撰

大抵散、在本書之中、今拾遺而追加之、

風聞從上古揚名一天顯德四方者、無過筆跡能書於然者欲繼累葉之塵垢者也、幼時跋雙親之畔、而役車馬之與、長而旋父母之邊、而學恩愛之語、稍重年序之間、志慤峨善住具平親王翰林之跡、而全學、頻而積時節之程、擬車胤孫敬之才、然天性愚癡、以晦大小乘之經教、根機暗鈍、而疎自他宗旨之章疏焉、不遂聞思修之念、惡強善弱、豈有種得脫之扶哉、爾今今日選月選日、染兔毫筆、汚魚網表、欲貽後來、然眞行草三體之趣、不存知仕、何勝何劣候哉、又行草之中、何可令始習候哉、答、手習之始、先習行書得筆自在、而後可令習草書也、行勝、眞草也、眞不通草、草不通眞、行者喻如通仕通仕者、如聞知和漢之者、行書定通眞草、餘不通、二歟、以此趣可令習也、問曰、就善惡書文字、何

樣書文字形又所繼所、不繼候哉、又厚薄候哉、何勝可令好習候哉、於一切之事有難否、如何、一々蒙仰、開雲霧可、如向青天候、答所云、文字之事、海大師曰、文間、善白、黑白、等同、左知、右長、懸針、垂露、反鵝、廻鸞、魚鱗、虎爪、定給、上者不可、有別之風情歟、墨厚薄之事、有得筆薄、磨不得者、厚可磨明鏡也、此二樣還爲、非能書厚磨不得、薄可磨、筆法集被分別、上者無不審、此次墨續之事、厚墨一字、薄墨一字、不並也、其厚墨者在行終、薄墨者在行上、墨並何處、可令嫌也、厚薄字以三字爲本、二字自無答云々、次字難事者、即知曲是如、次當眞行草、謂眞則爲難、行短爲難、草曲爲難也、以此趣、大樣可得心也、問、額色紙、扇經書外題等、以何字書、可令書候哉、不知、巨細、徒書穢、且懷、不知、由緒、謗、且招、災、得科之計歟、答、額字、其所從、昔有額榮福者、不違其本、樣、今初額者、瞻諸寺諸社之古額之體、而可草案之、名詮、故依、額體、不繁、員、有人榮福有衰弊也、能々清談、可書也、又色紙形者、本式者、有種々口傳、調四種樂技、

依時韻聞聲令書寫之也、或可令隨主好也、扇等以同之、次經書上書者內真外可爲真、古文草文併可隨、內題也、但真草隨主之好者常法例也、然貴人色紙形御扇等、可任手書意云々、

和強、毛品有太細、何爲勝可爲劣候哉、如何、不令間申、依難有、乍恐重々奉驚、高懸候條、恐最爲不少候、答所間給粗注文、習真者、打紙鬼毛和結筆崎、以如針可書之、習行者、強毛、生出結、打紙可書也、梵字者、天皇御灌頂之時、不慮之外書有之、故可書習事也、喻筆勢與音筋骨之態、慎憚申故也云々、不選老少中年、手跡欲習學者、高野大師巖扇影向祕術五德抄、當家以此爲筆、一妙書、彼書備五德、二者文字、形廣、衣紋吉、二者消息、衣紋長有勢吉、三者筆跡水付無煩吉、四者手本、近付本字新、而筆差別、能覺而吉、五者雙紙面、每文字作登文字量、並本字上、同寸方量、見字橫堅之趣、而書字形、故吉、都自能習一字者、思習千字云々、喻自

強力一人者、弱輩萬人勝云々、
一諸寺諸社之額之次第

尖
爾
茶

鋪
臨
品

八
播
營

日
比
田

一色紙書事
春風桃李
風翻白浪花

花開日

千片鴈點青

秋露梧桐

天字一行

葉落時

一真行草三體事

真者打立引捨之筆可有、意、自行少肉細、可書、如梨杖是、真云々、

一推圓捨、名

一推中返、

一推靜捨、

一推刀劍、名

一推急捨、

一推雀爪、

一推圓捨、名

一推插、

一推大、

韻學抄附錄二

一推圓捨、名

一推插、

一推插、

一切字八方番以其手跡又風情其只定字番者、譬力士骨番如強見此節字神也云々、

口

番ハ自餘也、自處モ太ク可書也、諸字獨リ立之時、篇作點如此等之成トモ、押ノ角ノ番ヲバ、押ノ大力ヲ入テ可書也、字ヨリ少太ク可書也、額ハ少平ニ可書、字ヨリ太可書也、

一觀ノ字自モ篇作ヲ篇ノ三間ノ二間之程可書、真行草以同シ度有口傳云々、

㊦

諸字ノ筆ヲバ柔順ニ可書、如何者日ト云字義心歟、

一社鳥居類書事

八幡額、田舎等新八幡宮如此之時、鳥形可書、鳥形者鳩行住坐臥飛鳴宿食見通委可書、此依爲仕者如此書也、祇園額、鴈體書、自餘社ノ額、鳥形可書、如何者鳥居云付名字義也、文字姿無鳥形打立引捨、飛鳥ノ姿ニ可書也、額體樣者、積傳集云、文字形二

字合、一分點之間、二分ト云ヘリ云々、

八幡宮

一異國牒狀書事

利劔形ニ可書、如何者爲合敵降伏也、墨ヲ厚摺可書、如何者調伏義也、消息等忌也、努々厚摺不可書也、

隄伏去

一諷誦願文書事

行可書、點少略、墨摺可書、如何者寂滅相現實也、一申狀願書卷數書事

文字真、點少細、薄墨ニシマズ紙白ニ可書、如何者息災延命行法者、以白色爲本故也、

一神願札書事

文字、行筆染可書也云々、

一宣命書事 行可書、終申ト云字堅點ヲバ長可曳也云々、

一宜旨書事 真行タルベシ、上太下細ニ可書云々、

一佛菩薩名號書事 真行草ヲバ主所望ニ可依也、上云所額如心馳筆使以同上、但番風情ハ如續目成合タル柔輓可書事、

一幡物書事 真字書、軍陣ノ旗ニハ鋒前ノ點可書、

一堂宮幡ヲバ柔輓可書之云々、

一堂宮壁物書事 雖有主所望可辭退乍去書之時者、能々安習而可書、點事垂露、橫露、如意、人足、生如、雲卷、石如、鳥頭、牛尾、蛇尾、蟬尾、鳥頭、星光、流波、流烈、春霞、懸帆、連猿、朽木、折條、虎爪、左、右柴ノ點可用也、不可有點事、絕命點、中絶ノ點、點ノ合字、不融點、雲出點、登火、懸針點、傍生點、長七尺間四尺、六尺間三尺、五尺間二尺五寸書也、相構々々柔輓可書也、其前其主祈禱點強ヒテ可書也云々、

行字可書、如何者福體也、爲令彼所豐饒也、垂露立可書、爲除災火難也、

一緣起書事

行草可書、柔順之姿云々、

一講式書事 佛書廣說在之、行草墨黑可書、又伽陀真行草ニ脛高ニ可書、讀行草柔順、天仁波ノ字假名可書、種々有口傳、

一往來書事 詞連累字一字充可書候ト云、字初ハ行中終ニ草可書、物名、人名、國鄉名、上所名乘、此等ヲ真行草交可書之云々、

一廻文書事 片行與ヲバ草行打交之可書四五六七ハ可連書也云々、

一御教書御請書事 行圓樣ニ可書、如何者政道義也云々、

一消息書事 讀吉見能樣可書、薄墨春霞靡姿ニ可書之、如何者遣所之主ヲ祈義也、

一關字事 太上、法皇、院宮、繪旨、繪言、勅定、聖斷等

- 一 屏風障子手習事 一尺字不可、大抵ハ上所ニ同也、五色紙形ニ似也、
- 一 燈爐書事 細高夕四角ニ字不透可書、而點略シ圓鮮ニト可書也、し繞ノ插立燈火輕登可書、如何者火焰隨風ヒラメキタル時、此點火連テヒラメキテ見苦也、
- 一 池銘書事 鴨頭點可書、然者鴨鷺ノ下ヲバ居遊姿准書之云々、
- 一 硯銘書事 馬蹄長芝池如、此時者、蹄引捨垂露書ベシ、芝於點飛鳥姿ニ可書、如何者鳥池飛廻居姿准也、
- 一 一切銘書時可得意事 眞行可書、又或蛸蚪飛鳥筆仕可書、又如法經之箇銘書時、蓮花散花又未敷開敷體可書也云々、
- 一 文抄銘書事 行眞可書、雖然本主所望ニヨリテ、眞行草可書之、相稱々々柔懷見吉様可書云々、
- 一 樂天銘書事 家々書傳在之間不註云々、
- 一 人磨銘書事 寂々云、木葉浪風姿可書散久方云歌時、梅花散姿打交、文字少テリト、花交可書、眞名銘行物柔懷可書也云々、
- 一 石物書事 墨厚摺、石面ヲ巾ヲ水ニ塗シテシボリテ、其下ヲ可巾也、然シニ可書也、
- 一 木物書事 切口ヲ不削、
- 一 布物書事 少塗可書也、
- 一 繪具上物書事 且糞垢指推巾彼所可書、尙不付之時者、且糞硯摺台可書也、
- 一 朱以物書時、ナマヌル湯ニ入テタシテ摺合可書、色殊以鮮也云々、
- 一 坪付充文寄進狀書事 行ノミ可書者、後見爲也、
- 一 一切物書時可得意事 先筆點即時ニハ一字二字小字可書、推付書時文字太見也、次字推付可書、如何者上字次ノ字相應吉、又次字筆浮少推付可書、又次字筆崎細少任筆可書、推付墨乾テ書時、墨付意書自然墨出來、墨出來有口傳、如此手本可寫、墨

- 續乾ナレバトテ、無左右不可續也云々、
- 一 依手本筆柔與剛可用之事 柔筆書手本字角有、又刻姿有、緩々而フハメキタル姿少有、又剛筆書手本者刻姿有、筋勝給也、能手本何様之筆書見分可寫、無左右不可筆所用云々、亦口傳云、如口傳不可之時、定可有失錯歟、手本者何モ以書、又何様風情可書姿、亦手本書年齡可見、能々手本心地見定可寫、口傳上我與了簡可加者歟、
- 一 筆結事 道風好筆、紫毫筆末代難有物也、我加了簡結之處、眞物者、兔毛心立、上毛者冬毛細薄懸、緩緩委柳葉可結也、筆法事、堅取無角而筆裏筆可爲也、行者心秋二毛立、上者冬毛細懸姿如筭可結、堅取立筆立テキリト可書、草者妻鹿夏毛以可結、姿者鷄距如可結之、緩々取堅可動筆也、佐理者、眞者赤兔毛心少延細長可結、少立可結、面筆立留所者中筆打立動ユブメカシト引指操、留所クリクリト愛々ト可留云々、行成者、眞物白兔毛用之、

- 橫筆打立、中筆可留、行者秋二毛心立、上毛冬毛懸可結、立筆中筆打立ヲ捨所中筆可捨、草ハ冬毛以、緩緩結、少橫筆立、中筆可仕也、道風者、立筆裏筆、佐理者、中筆少橫筆、行成者橫筆圓立、此等心得可寫習也云々、
- 一 經朝追加云、朗詠者公任卿隨分仰也、於化天寺御作、或漢家本朝之名詩集之、於化天寺御作書事者、種々口傳有之歟、手跡家々秘曲只此事也云々、眞行草假名四ヶ書程之以手跡可書之、不可然者不可書之云々、亦云、明衡往來其國中不聞其名者、因可令斟酌以同前云々、
- 白川額三位經將在判 經都按將は判の筆寫ならん、經朝額を白河、ミ云々、
- 寛政九年十二月書寫了 經 亮
- 右一冊以塙家所藏本寫之 小杉 楳 郵
- 按するに、兼明親王御時代の文體にあらず、恐らくは後世のものならむ、されどこの法は舊く相傳する處ありしものならむ、謹みてよく味ふべし。

金玉積傳集諸額書次第終

筆法才葉集

宰相入道教長口傳 海住山正三位長房記之

教長卿事、後白河院保元元年七月十六日、受左大臣賴長公ト共ニ謀反ニ依テ流罪、

師長兼長教長三人流罪、貞享元年マテ五百二十九年、

賴朝云、教長卿を左府の子ミするは失儀なり、恐くは左府の子に能長あるをかくいへるにか、

賴朝云、教長卿は忠教卿の六男なり、委くは別にいへり、

安元三年七月二日於高野山密談

一凡未染墨新筆ニテ書文字ハ、ヲビトキヒロゲテ悪シ、墨ヲ塗テ、少シ墨枕有ガ書吉キナリ、

一法性寺殿ノ御筆書ハ、類從本作ク、人ノ右ヘヒラミタルナリ、

一文字ハ一字々々取放チ見ル、各々ウツクシク見ユル様ニ可書也、仍重ナル文字ハ、高アルベキナリ、並ブ文字ハ、横廣アルベキナリ、

一墨ヲ筆ニタブ〜ト染テ可書也、

一行ノ物ノ中ニ、眞ノ字ヲ可相加也、道風ハ左様ニ被書ヲ愛敬ト云ナリ、

一文字不具ナル事不可有、篇小クシテ作大キニ、若シハ篇大ニシテ作小キ事ナリ、道風、佐里、行成ノ手跡ニハ、不具ナル文字全ク无キナリ、

一長ク引點ハ、餘ニユガマズ、ウルハシキハ、ヨワキ也、少々ユガメカシテ可引也、

一頭ノ字ハ、皆平ラミタル也、其ガ吉ナリ、

一文字ハ、ウルハシク書ク見トホシアル也、點ヲカタヨセナドシタルハ、一旦ノ愛敬ニテ、始終見ヨワリスルノ相、

一未練ノ間ハ、文字ヲ高ク書ベキナリ、究竟ニナル時ハ、少シ文字ハ、平ニ成ル事ナリ、サレバ道風ナドノ書タルモノ、若キ時ノ手ハ、文字高キ也、究竟ニ至テ後ハ、ヒラミテ見ユル也、

一申狀并諷誦、願文ハ、眞ニ可書也、廻文ヲ、バ行ニ可

書也、

一眞ノ物ノ筆ハ、タテザマナルベキ也、イ本サカサナノ筆ハ、ナバウベキ也、

一法性寺殿ノ手ノ若キ時ノ、攝政ナドノ時吉也、アマリ二年ヨリテハ、筆ヒラミテ、打ツケ〜被書故ニ、習人ノ手可損也、何モ意得ベキ也、

一點ノ終リノ筆ヲ、バ必返スベキナリ、夫レガ吉也、一筆ヲ打立テ後ハ、行クニ任セテ可書也、夫レヲスマイ書ツレバ、筆モコホク見エテ悪シ、緩々ト指延タル筆ニテ、ミタ〜ト不成書タル物ハ、見立テ有ナリ、コハキ筆ハ、見立テ無キナリ、

一手書ハ、常ニ物ヲ可書也、不然筆惡ク成ナリ、一文字ハ、分テ一字モ直類從本書キ、合字ニテモ見吉カルベキヤウニ書事ハ、大旨ノ事也、文字ニヨリテユガメテ篇ヲ書テ吉字モアルナリ、可心得、一前點ハ、兼後點約東ナレバ、眞草行トモニ、前點筆ノ崎ヲ受テ、後點ノ始ヲバ可書也、

一文字ヲ、バシミカル〜ト書ベキナリ、ハツキタルハ、見惡キナリ、

一行成ノ手跡ハ、筆ニ任セテ書レタリト見ユルナリ、

一又法性寺殿ノ筆ハ、若アリケルヲ取セ給ケルカ、

一入木道ノ骨目トハ、森羅之依報大聖文殊之形也、故

ニ無筆不可有文字、無文字者天竺震日等ノ聖教モ不可有之、無聖教不可有度人、以筆爲骨目、故筆硯童子ハ、提筆坐シ給ヘリ、自此已來有筆、有筆有文字、隨文字有眞草行眞行草トハ、有筆崎、筆崎實トハ、萬事ノ骨目ナル故、以筆道入木道之第一ト云ト云々、

一於筆有三體略舉之、一雀頭、眞ノ二柳葉、草ノ三鸞爪、行ノ

一筆ノ軸ノ長サ五寸或ハ三寸、大筆ハ五寸ト云々、何レトモニ心ニコリキ毛ヲ以テ結テ、次第ニ上ラカナル毛ハ、和ガ吉ナリ、眞ノ物ニハ、以夏毛心ニメウ脱カノ毛ヲ以テ上ニカケベシ、二ツモ三ツモカケルナリ、